

# 日本醫史學雜誌

第 21 卷 第 2 号

昭和 50 年 4 月 30 日發行

---

第76回 日本医史学会總會抄録

## 特別講演

- 日本学校保健史……………杉浦 守邦…( 3 )  
日本細菌学小史……………藤野恒三郎…( 7 )

## 会長講演

- 大阪にある蘭学史跡……………中野 操…( 11 )

## 原 著

- 解体新書について……………小川 鼎三…( 46 )  
解体新書出版から 200 年……………緒方 富雄…( 53 )  
越後の蘭方医森田兄弟について (四) ……長谷川一夫…( 67 )

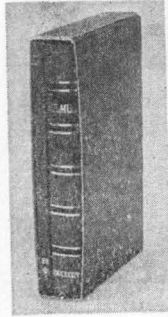
---

通 卷 第 1400 号

日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷2-1-1  
順天堂大学医学部医史学研究室  
振替口座・東京 15250 番  
電話 (813) 3111 内線 544

# クルムスターヘル ・アナトミア



校閲および解説

東大名誉教授  
東大名誉教授

この歴史的な機会を一層意義あるものとするため、われわれの先駆者が使用したのと同版のターヘル・アナトミアを復刻。別巻として小川・緒方両先生の解説と、解体新書全四巻の縮写版を添付。

雄三 富鼎

蘭学事始で主役を演ずるターヘル・アナトミアは解体新書翻訳の原著で、ドイツ語の原著第二版の蘭訳本である。

# 綱提範医 全3巻 網提範医 全1冊

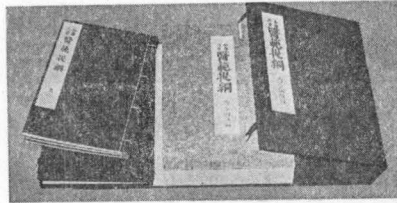
内象銅版図

医範提綱本文

土佐楮手漉和紙・精巧オフセット印刷・濃紺地布貼特製帙入

福井手漉局紙厚紙芯折帖仕立・精巧コロタイプ印刷・濃紺地布貼特製帙入

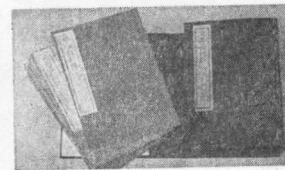
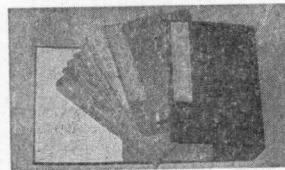
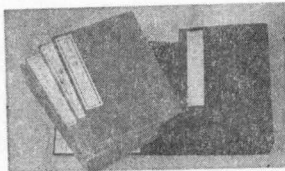
領価 限定版三〇〇部  
三八、〇〇〇円



付・別巻  
解体新書(縮写版)  
限定 五〇〇部  
価 二五、〇〇〇円  
送料 四五〇円

## 本間玄調 内科秘録 瘍科秘録 続瘍科秘録

全14冊 全12冊 全5冊



本書は、華岡青洲・シーボルトに師事して出藍の誉れ高い日本外科学の先覚者、棗軒・本間玄調の著作である。当時医師の金科玉条とされ、特に正統瘍科秘録は、華岡流の外科学の奥義の秘法を公開したもので、天下の耳目を聳動させたといわれ、ために玄調は青洲より破門されたと伝えられている。

内科秘録は、玄調六十一才の著で、漢方内科に非凡の学識を示し、再度当時の医学界を驚嘆させたものである。

瘍科秘録・内科秘録共に稀覯本として、入手・閲覧が困難で、現在も尚医学教課の資料・参考書としても高く評価され、医学の高度に進歩した今日も依然として光彩を放っている。この巧芸版は、用紙・印刷・製本等に現代技術の粋をつくして、原本に忠実に復刻したもので、医学者の研究・教育資料として、また、古典籍愛好家の鑑賞用・保存用として、貴重な文献である。(矢数道明氏蔵)

本文Ⅱ特漉因州楮和紙・コロタイプ印刷・和綴じ 帙函Ⅱ内科秘録 金茶緞子織 瘍科秘録 続瘍科秘録 紫紺絨柄装・豪華特製 上質紙張美麗箱入 領価Ⅱ内科秘録 拾七万円 瘍科秘録 拾貳万円 続瘍科秘録 八万円

# 第76回日本医史学会総会演題目次

## 特別講演

|              |            |     |
|--------------|------------|-----|
| 日本学校保健史…………… | 杉浦守邦……………  | (3) |
| 日本細菌学小史…………… | 藤野恒三郎…………… | (7) |

## 会長講演

|                |          |      |
|----------------|----------|------|
| 大阪にある蘭学史跡…………… | 中野操…………… | (11) |
|----------------|----------|------|

## 一般口演

|   |                |      |
|---|----------------|------|
| 1、古代インドにおける胎児発育の諸説……………                               | 杉田暉道・中田直道…………… | (12) |
| 2、地蔵三部経と民衆の治病希求……………                                  | 関根正雄……………      | (14) |
| 3、明治二年刊行の民間産科指導書「安産仙翁邦言教諭」について……………                   | 玉手英典……………      | (16) |
| 4、刺青史の資料……………   | 大矢全節……………      | (17) |
| 5、徳川時代の鉾山の珪肺……………                                     | 三浦豊彦……………      | (18) |
| 6、日本放射線医学史と技術史の構成私案について……………                          | 今市正義……………      | (19) |
| 7、中国中世における医者地位について……………                               | 山本徳子……………      | (20) |
| 8、「医師の誓詞」について……………                                    | 三木栄……………       | (21) |
| 9、ニコラース・トゥルプとその医学業績……………                              | 古川明……………       | (22) |
| 10、麻酔の初期発展——とくに John Brown と Thomas Beddoes について…………… | 栗本宗治……………      | (23) |

- 11、X線による消化管運動の研究者キャノン教授……………中山 沃……………(24)
- 12、土生玄碩のシーボルト散瞳薬伝授に関する一考察……………福島義一……………(25)
- 13、江戸時代の腊葉について……………矢部一郎……………(26)
- 14、最近見出した若干の資料について(京都の医学史展に際して)……………杉立義一……………(27)
- 15、一気留滞論と万病一毒論……………大塚恭男……………(29)
- 16、小浜藩における林野家(小石元俊の祖)の事蹟について……………田辺賀啓……………(31)
- 17、本木庄太夫の医学……………小川鼎三・酒井シヅ……………(32)
- 18、いわゆるターヘル・アナトミア(一七三四)の相違について……………酒井 恒……………(34)
- 19、コンスブルック内科書について……………阿知波五郎……………(35)
- 20、ブレンキの婦人病論の原書とその日本語訳書との比較検討……………大鳥蘭三郎……………(36)
- 21、宇田川榛齋著「内外要論」について……………大滝紀雄……………(37)
- 22、江馬蘭齋の「泰西熱病集訳」について……………安井 広……………(38)
- 23、緒方洪庵の書翰二通……………岩治勇一……………(39)
- 24、林洞海の晩年……………土屋重朗……………(40)
- 25、「貌氏成形手術図譜」と小山内建……………星 栄一……………(41)
- 26、宮城県における明治初期の医学教育と横山謙介……………山形 敏一……………(42)
- 27、吉田顕三(一八四八—一九二四)のこと……………丸山 博……………(43)
- 28、本邦海軍々医制度史序説……………長門谷洋治……………(45)

## 特別講演

# 日本学校保健史

杉 浦 守 邦

### 一、明治前期の学校衛生

明治五年（一八七二）学制の発布にともない、わが国の近代学校教育制度が発足したが、最初にとりあげられた学校衛生施策は、伝染病の予防であった。明治初年諸外国との交流の活発化にともない、痘瘡・コレラ等の侵入を受けた苦い経験から、学制の中の一章に「小学校ニ入ル男女ハ種痘或ハ天然痘ヲ為シタルモノニ非レバ之ヲ許サズ」と規定されている。さらに明治一二年の教育令ではこれを伝染病全体に拡大し、罹患者の出席停止を命じ、次いで学校閉鎖の規定を設けて、その予防にあたらしめている。

しかし当時の学校の環境衛生はきわめて不備であり、かつ一般に知育偏重に流れたため、学徒の間に結核や脚気等の疾病による退学者が続出した。そのため当時のお雇外国人ベルツやモルレーらも日本教育の欠陥を指摘し、文部当局に環境の改善、学科の軽減、体操の普及等の建言を行なっている。このような事情から明治一年神田一ツ橋に体操伝習所が設立された。ここで開始した活力検査が日本における学校身体検査の草分けとなったのは意義深い。この体操伝習所の教師として招かれたG・リランドは、ハーバード大学医学部出身の医学士で、彼の伝えた体操術は軽体操又は普通体操と呼ばれ、ドイツに勃興した医療体操の流れをくむものであった。

当時学制では下等小学で「養生法」の学科があり、今日の保健教育に該当する授業がなされていたが、これは間もなく廃止されて、以来昭和二〇年まで義務教育段階の保健教育は軽視され、わずかに修身と理科の中でふれられるにすぎない状態であった。明治一四年文部卿名による「小学校教員心得」中で「身体教育」の重視が説かれ、明治二七年文部大臣から「体育及学校衛生ニ関スル訓令」が出されて、児童の保健管理につくすよう指示がなされたが、大した効果はあがらなかった。

## 二、明治後期の学校衛生

明治二七・八年の日清戦争勝利後、わが国は積極政策に転ずるが、教育分野においても壮大な体系整備に着手した。その機運にのって学校衛生制度も大いに発展した。

まず明治二九年（一八九六）当時の医学・衛生学・衛生行政関係の権威を集めて学校衛生顧問制度が設けられ（三宅秀・緒方正規・小金井良精・後藤新平・長谷川泰・ベルツ・三島通良ら）その諮詢をへて次々と諸法令が制定されていった。三〇年学生生徒身体検査規程・学校清潔方法、三一年学校医令・学校伝染病予防及消毒方法、三二年小学校設備準則・中等学校建築準則など今日もなお形をかえて存続する諸令規はこの時定められた。なかでも学校医令は全国の公立学校に学校医を設置することを国の制度として規定したもので、世界でも先端を行くものだった。そしてこれによってわが国学童の発育状態・疾病状態が初めて明らかにされた。

しかし明治三〇年頃より一〇年間にわたって国内に激しいトラホームの蔓延がおこり、学童の半数以上がこれに罹患するという事態に直面して、学校衛生の中心課題がこれに移り、校内洗眼が行なわれるようになるにつれて、学校医の助手として学校看護婦が出現するに至った。

### 三、大正期の学校衛生

第一次大戦終結後世界を風靡したデモクラシーの風潮の中で、児童愛護思想が勃興し、児童中心主義が台頭した。それにともない明治時代の疾病欠陥児はこれを学校外へ排除するという姿勢から一転して、これを学校の責任で積極的に救済保護する方向へすすんだ。ことに就学率の向上により、疾病異常児の学校への大量の出現は、学校医の役割を飛躍的に高めることとなり、従来の身体検査と環境衛生監視の役割のほか「病者・虚弱者・精神薄弱者等ノ監督養護ニ関スル事項」も職務に加えられることとなった。

これにとまなう施策の第一として学校診療が実に広範囲に実施された。対象としてトラホーム・腸内寄生虫・皮膚病(湿疹・白癬・凍傷・頭虱)・アデノイド・う歯等がとりあげられ、さらに眼科医・耳鼻科医・歯科医が学校医の分身として加わるに至る。一方公衆衛生の普及にともない治療から予防への動きが現われ、ことに青年期の結核死の異常な上昇に対する危機感から、学齢期における虚弱児・腺病児に対する養護鍛錬行事(林間学校・夏期聚落等)が結核予防の旗印の下に精力的に展開された。近視予防策もこの頃大いに宣伝される。

### 四、昭和前期の学校衛生

昭和初頭世界的におこった経済恐慌と、続いて襲った農村の不況、大凶作などは多数の欠食児を輩出させ、報道では欠食児一〇万、栄養不良児六〇万といわれた。これを救済するため昭和七年(一九三二)から「学校給食臨時施設方法」による学校給食が開始されたが、一方虚弱児のために、養護学級の編制、肝油の服用、太陽灯の照射などの事業がとりあげられた。

満洲事変、支那事変と戦時体制がすすむにしたがい、学校衛生の重心は体位向上に向けられるが、さらに太平洋戦争勃

発後は結核対策にしばられて行く。ツベルクリン反応、エックス線撮影、結核菌検査が身体検査にとり入れられ、学校では特に陽転者・要注意者の健康管理および陰性者に対するBCG接種が最大の任務となる。一方この時期に学校歯科医・養護訓導の職制が誕生する。

## 五、戦後の学校保健

戦前学徒の体位が最高を示したのは昭和一二・三年であるが、戦争の苛烈化、続いて敗戦は深刻な食糧不足、環境悪化を招き、ひいては学徒の体位をドン底に陥れ、著しい疾病の蔓延をもたらした。栄養失調・結核・寄生虫・皮膚病の多発はすさまじいものがあった。しかし昭和二一年（一九四六）進駐軍放物資をもつてする学校給食の再開、結核検診の徹底、精力的な寄生虫駆除などの施策によって、ほぼ一〇年後にはこれらの疾病はほとんど姿を消し、学徒の体位も戦前の最高値をこえるに至った。学校保健における戦後は約一〇年で終わったといつてよい。

しかしここに新たな問題として、肥満・心臓病・腎臓病・リウマチ熱・ぜんそく・情緒障害等の出現が注目されると同時に、戦時中いったん減少した近視・う歯等の急速な増加が憂慮されている。

現在法制的には学校保健法・学校給食法・学校安全会法の三法がととのい、専門技術者として学校医・学校歯科医・学校薬剤師があり、又校内には保健主事・養護教諭・学校栄養士が配置され、保健教育関係も学習指導要領の整備によって小・中・高一貫した教育指導が行なわれているとはいえ、今後になお残された問題も多い。

（山形大学教育学部）



## 特別講演

### 日本細菌学小史

藤野恒三郎

パストゥールとコッホによって基礎をつくられた細菌学を、われわれの先輩はどのようにして受け入れたのか、わが国内で細菌学がどのようにして発展したのか？ 私は、細菌学を学びはじめた頃から注意して資料をもとめてきた。

パストゥールが、微生物の自然発生説を完全に否定する実験に成功した時点を、わが国に当てはめると、緒方洪庵はまだ生きている頃である。

自然発生説の否定とウイルヒョウの細胞病理学説とは、ともに、明治維新以前にはわが国内に紹介されていないようである。

日本細菌学は緒方正規からはじまる、即ち明治十七年（一八八四）ドイツから病原菌の純培養株を持って帰り、泉橋の内務省衛生試験場内に研究室をもち、そこへ北里柴三郎らが入門した……と細菌学事始を表現してよいと思われる。

しかし、実際には、これよりもかなり前から、病原微生物に関する講義が行なわれているし、その講義録は出版されていたのである。

明治三年（一八七〇）に大阪医学校へ赴任した蘭医エルメレンスの原病学通論（明治七年版）に、トリコフイートン、オイデウム・アルピカンスやザリチナーなど病原菌の解説が見られ、また、エルメレンスの生理新論（写本）には、複式

顕微鏡の光学理論とその使用法が詳しく述べられている。

明治十二年（一八七九）に刊行された三宅秀の病理学総論（六巻）の中では、植物寄生の即ちバクテリアの類と酵母の類を正確に区別して、その分類学的説明に及んでいる。

コッホによって結核菌が発見された年、一八八二年（明治十五年）には、柴田承桂の「顕微鏡用法」が出版されて、細菌と真菌の形態が示されている。顕微鏡の最高拡大率は三五〇倍である。

コッホの結核菌発見（一八八二）の業績は、一つの重要疾患の病因を明らかにしただけではなく、病原菌決定に当たってなさねばならない原則、Koch's Postulatesとして今日でも生きている原則を、ここで確立した意義は大きい。予想される反論を否定するために、コッホは結核の病原菌決定に際しては、吟味の上に吟味を重ねたのであった。

東京医事新誌によれば、結核菌発見の報が日本に紹介されたのは、二年後となっている。即ち、緒方正規の帰国の年と一致し、またこの年には、コッホのコレラ菌に関する情報も入ってきたにちがいない。

内務省衛生局長長与専斎はドイツとフランスで起りつつある細菌学情報を把握していたので、緒方正規と北里柴三郎の細菌学への道が決められた。

ドイツ留学中の北里は、水素ガスを利用して嫌気性菌の純培養に成功したので、これを破傷風菌の純培養に応用し、破傷風菌毒素の研究は大きく展開した。そして、破傷風毒素によって免疫された動物血液によって、破傷風の予防と治療の可能性を動物実験で証明した。

ジフテリア毒素を使った同様の研究を行っていたベーリングとの共著のかたちで、これは発表されている。

日本細菌学史を綴るとき、いくつかの世界新記録をあげることができるが、その第一号は、このようにして、ベルリンのコッホの研究所内であげられたものである。

北里柴三郎のペスト菌、志賀 潔の赤痢菌、エールリッヒ・秦 佐八郎のサルバルサン、稲田竜吉・井戸 泰のワイル

病原原スピロヘータ、二木謙三・高木逸磨・谷口腆二・大角真八の兎咬症のスピロヘータの発見などが、明治大正期の傑作として承認されている。

埋れている真実と真理を求めめる探究の結果、確信をもって発表された業績のうちいくつかは、追試承認を得られずに学界から消えていった。

恙虫病原が一種のリッケチアであることは、昭和二年（一九二七）緒方規雄によって明確され、追試承認を得たが、その学名の問題は長く解決されなかった。

発疹チフスに似て非なる満洲の発疹熱を、リッケチアの立場から鑑別に成功した児玉 誠らの研究によって、内地の発疹熱の存在が明かにされた。

昭和七年（一九三二）になると、谷口腆二らは痘瘡患者材料と痘苗接種材料から、ウイルス小体を光学顕微鏡下に証明できる、再現性に富んだ研究方法Ⅱ染色法を提案して、ハンブルクの船員病熱帯病研究所のパスセンの主張するいわゆるパスセン小体を強く支持し、またガルニエリー小体病原説を否定した。この論争の結果、ウイルス病の研究からウイルスそのものへの研究へと発展しはじめた。

昭和十年（一九三五）、宮川米次らは兎蹊淋巴肉芽腫（第四性病）病原のマウス伝達に成功して、病原 (Miyagawa-nella Lymphogranulomatosis) を発見した。

昭和十年（一九三五）には、各地で日本脳炎の大流行が起った。

米国のセントルイス脳炎ウイルス分離法にならって、マウス脳内接種によって日本脳炎ウイルスは、病室から研究室へ持ちこまれることになった。

かくして、はからずも日本のウイルス研究は急に活気をおびた。

この時、笠原四郎が分離した中山株は、戦後の日本脳炎ウイルス不活化ワクチンのシードとして活用された。また、こ

れに続いて、三田村篤四郎らはコガタアカイエカによって、このウイルスは媒介されることを明かにした。

要するに、日本の細菌学は、昭和に入ってからリッケチア学とウイルス学に於て大きな成果をあげた。

昭和十二年（一九三七）七月七日、支那事変が始まり、昭和十六年（一九四一）十二月八日大東亜戦争へと国をあげて突入させられた。

昭和十七年（一九四二）夏、南方からの輸送船が持ち帰ったデング熱が、大阪でもかなり大きな流行となり、谷口腆二らはマウスと台湾猿へのウイルスの伝達に成功した。この証明のために多数の志願学生が接種デング熱を発病したが、このおかげで、この研究は短時日の間に完成した。筆者もその一人であったので、ビルマでデング熱にだけはかからなかった。

敗戦病と言われる発疹チフスが流行し、発疹チフスワクチン製造を急いでいる大阪で、昭和二十一年（一九四六）十月、筆者は第二の人生を始めた。

昭和二十二年（一九四七）四月、第十二回日本医学会総会が大阪で開かれたが、この総会の最大のトピックスはペニシリンであった。

（大阪大学名誉教授）

## 会長講演

# 大阪にある蘭学史跡

日本医史学雑誌・第二十一卷  
第二号・昭和五十年四月 昭和五十一年一月 日受付

中野操

大阪に現存する蘭学史跡のわずかすをスライドで案内したいと思う。

海上随鷗の門人松本寛吾の墓碑発見にまつわる執念と偶然の動機、中家の墓地のその後の転変などについて述べ、学者は墓碑を残すよりも、すべからく業績を著述の上で残すべきだとする希望を強調したい。

## 一般口演

### 古代印度における胎児发育の諸説

杉田 暉道・中田 直道

古代印度のすぐれた医学を伝えるスシュルタ本集（大地原誠玄訳）をもとにして、胎児发育について述べている二、三の仏典の記載事項の比較検討を行なった。

ここに用いた仏典は増一阿含経卷三十、修行道地経卷一、瑜伽師地論卷二、俱舍論卷九、大集経卷二十四、大宝積経卷五十五および卷五十六の七經典である。これらの經典を概説すると、増一阿含経は原始仏教の教典で、真理を体得するための四諦説（苦諦、集諦、滅諦、道諦）とこれに基く八正道（正見、正思、正語、正命、正精進、正念、正定）

を説き、さらに煩惱に悩まされる原因を明らかにする縁起説を唱えている。修行道地経は禅觀修道の順序を示しており、卷一は衆生の生まれるということは業因縁の力によって五陰の成敗するのみなのであるとしている。五陰とは胎に入るを色陰、歡喜の時を痛棄陰、精を念ずるを想陰、入胎を得るを行陰、胎中に処するを識陰の五つをいう。瑜伽師地論は中觀（諸法は空であるという考え方）哲学を体系づけたもので、俱舍論は小乘仏教の代表的綱要書である。大集経は一面は般若系統の空思想を、地面では密教的な思想を説いている。大宝積経は種々の經典を集めたもので中央アジアで成立したといわれている。大集経の一部も中央アジアで成立したと考えられている。

さてスシュルタ本集では胎児は十二カ月で出生するとし、一カ月は初胚（羯邏藍）が生じ、二カ月は硬肉期（健南）である。形が豌豆状に円いときはピンダと称し男性を表わし、長形肉塊状の時はペーシ（閉戸）と称し女性を表わし、長円塊状の時はアルブダ（頰陀曇）と称し中性を表わすと述べている。三カ月は両手、両足及び頭の五隆起発生し、

肢節、副肢節の区分は極めて細微である。四カ月は一切支節の区分がよいよ明らかとなり、心臓の形成がはっきりし、意識が明晰となる。五カ月は更に意識が明瞭となり、六カ月では覺を生じ、七カ月は一切の肢節、副肢節と区分ますます明らかとなり、八カ月は活力減じ、たとえ生まれても活力がない為と死神につかれた為に死ぬ。これを防ぐには悪靈に供物を行なうとよいとし、九、一〇、一一若しくは一二カ月に分娩が始まると述べている。

これを仏典についてみると、増一阿含經と大集經を除いた五つの仏典では、胎児の發育を七日を単位にして發育の状態を観察し、三十四週、三十八週、または八カ月か九カ月で分娩を行なうという。増一阿含經では「先きに当に胞胎を受くべし、漸々にして凍酥の如く、遂にまた息肉の如く、後転じて像形ぞうぎょうの如し。先きに頭項ずじょうきょう頸を生じ、転じて手足の指を生ず。支節各々生じ、髮毛爪齒成る。若し母飲食するとき、種々若干の饌ぜん、精氣用しんきよもちもつて活命みことし受胎のもとなり。形体ぎたいもつて成満し、諸根欠漏せず、母によって出生を得。」とある。大集經では、一〜五週を歌羅々とし、

六週を額浮陀がくぶだ、七週を伽那、八週を閉戸とし、十二週を腸の相ありと述べ、二十週では男女の性別が分り、二十一週では骨節を生じ、三十六週では血肉毛根を具え、三十八週になると身肢を具え、三十八週後では四夜腸中臭穢の処に住すと述べ、このように生苦を味わうのであると説いている。他の經典では、一週を歌羅邏または羯羅藍とし、二週を安浮陀身または頰部曇とし、三週を閉手または閉戸とし、四週を伽那または健南けんなん（鍵南）とし、五週を般羅奢佉はんらしやことしてゐる。六週以後は身体の各部分の形成されていく状態を各週毎に記している。修行道地經では、先に述べた五週までの特異な名称がなく、胎児の發育していく様子を、単に述べているに過ぎない。さらに瑜伽師地論では胎藏八位、俱舍論では胎内五位と、特に銘記して胎児の發育状態を述べている。

このように仏典によっても胎児の發育についての記載にかなりの違いがあることがわかる。けだし、瑜伽師地論や俱舍論では、中觀哲學および小乘仏教のいわば教科書であるために、教義の考えが中心になって、胎藏八位または胎

内五位という明確な形を示したと思われる。増一阿含經は他の經典に比べれば、素朴な形で述べられているのは、まだ、仏教の面からみた胎児の發育についての思想が確定していなかった為と考えられる。他の經典は、生まれてくる苦しみを十分に納得させるために、一週毎に詳細に述べられているのであろう。

(横浜市立大・医)

## 地藏三部經と民衆の治病希求

関根 正雄

民間信仰の治病希求のなかでは、地藏信仰は代表的なもののひとつである。地藏信仰の所依の經典は、いわゆる地藏三部經である。その教義は、地藏菩薩を主役として、衆生の「苦と苦因」とを消滅させて悉く淨信心を起させるところにある。

この三部經は、第一に『地藏十輪經』をもって、地藏ボサツ本来の資質がのべられ、小乗を排する大乘仏教への導きを示す。『地藏本願經』では、このボサツ本生の物語をのべてその本願を明らかにし、衆生のもつ多種類の業とその報いとに従って教化するのが、このボサツの徳行であることを示す。さらに、『占察善惡業報經』では、末法の世界である現世で教義流布の實際を進めて、宿世や現世の悪業は占察で明らかとなることを教へ、『十輪經』の教義を



拡大する。

この所説のなかで広く治病に関することは、仏尊の側からみて、衆生の病苦というものは衆生自らのもつ無明から起るのであるから、衆生を悟りに導くことで病氣は除かれるとし、しばしば「有情を成熟」ということばにこれを含ませる。成熟への達成のためには、地藏ボサツは「善巧方便」をもって「十方界に変身」して民衆に近づき、悪報の意義を個別的に教える。そうして、地藏ボサツ自身は大悲大慈など一〇種の徳行を備えて、除病し濟度する能力のあることを説くのである。

また、民衆の側からみて、治病希求の対衆である身体的病患は、四大の空なる地水火風の不調から起ったものを知るべきで、ボサツの心を理解して祈念すれば、「多病」も新生児の障りも慈悲の心をもって救われるとするのである。『本願経』の「如来讚嘆品」では、このとき民衆の採るべき行為が具体的に示される。

しかし民衆の希求は、教義よりも現実の「除病滅苦」を求めすることに急であるから、自然とここに民間信仰として

の地藏信仰ができていく。現在の日本では、このようにして地藏尊信仰として極めて具体的に、延命地藏・子育地藏・とげ抜き地藏・めやみ地藏・疣取地藏などの通称を与えて、直接的な治病希求を祈念することが多いのである。

(群馬県・大田病院)

## 明治二年版行された民間お産指導書

### 「安産仙翁邦言教諭」について

玉手 英典

仙台市に在住する産婦人科医五十嵐宏一氏方に約百年前から伝わる版木が八枚ある。明治二年に彫刻され、初版が刷行されたのが表題の小冊子である。宏一氏の曾祖父たる汶水（明治二四年没）が著述し刷ったものであり、その動機や配布の方法に注目し値する点があり、この僅か二八頁の小冊子の内容が実にユニークなものであり現代にも通ずる点がある。

汶水は宮城県刈田郡円田村（現蔵王町）に居をかまえ、産科医として名声あり、家の傍に数百年の樹令を持つ「アミダの杉」（天然記念物指定）があるがその樹下に「だるま堂」と称する一小祠を営み安産の守神としたので、祭礼の日には多数の参詣人が集り安産を祈願した。お堂からは安産のお守り、まじない札、お茶、おはぐる葉などを頒布し、

此の小冊子を無料で配布した。

慶応大医学部の情報センターにこの初版本とも思へるものがあるが、出所は山形の金山某なる産科医であることから可成広く用いられていた様である。内容について注目すべき点を述べると次の通りである。

(1) 西洋医学の知識を以って具体的な養生法や治療法を詳細にのべている。

(2) 平易な通俗的な文体で書かれている。即ちなまりおつけである。

(3) 人命尊重の大切な事を説き、四、五十年に一度しかない飢饉にそえるより山里離れた辺地の一軒家にも必ずある出産の心得を知って一人でも多くの赤ん坊を無事に産ます方が大切だと喝破している。

(4) 自らの学問や技術を一子相伝の秘密とすることをせず一般に公開して憚らない。

汶水の没後養嗣江水はその墓を「だるま堂」背後の丘陵地の斜面に建立し、女陰状の孔穴を有する奇妙な形の墓石を安置した。此の墓所も又安産信仰の中心と見なされ、参

詣人あとを絶たず、祭日には境内に売店の列が並んだ由であつたが、近頃は全く寂れ、今年の祭日にはほとんど拝む人は無かつた。

深刻な食糧不足と貧困に苦しんだ東北地方の一農村に人命尊重を強調し産科医療を行つて多数の赤ん坊を救い、又、高度の西洋医学的指導の内容を持つ指導書を民俗信仰を利用して地域に頒布した汶水の卓見は驚異に値する。

(宮城県医師会史編纂室)

## 刺青史の資料

大矢 全節

刺青史の研究において、刑罰の一形式として行われていた所謂「入れ墨」は犯人の前科を知る鑑別的手段として、古い時代から用いられて来た。

これに対し、江戸時代に流行した勇み肌を誇示する刺青は「ホリモノ」と呼んで、前者と区別して考証すべきである。入れ墨は墨形で強制的に行なわれるのに比べて「ホリモノ」は、代金を支払つて、時好に投じて希望して刺青を受けるものである。

ホリモノの研究資料はあまねく渉猟されているが、入れ墨、墨刑の資料は少なく、研究の余地が多く残されている。演者は偶然の機会で中国で出版された「刺字条例」と「刺字集」の資料を入手することが出来たので、ここに紹介する。

刺字集は光緒丙戌一二年一八八六年、刺字条例は光緒乙未二一年、一八九五年に上梓された。

これらの中国における墨刑の纏った資料は日本の入れ墨が中国から輸入されたものと考える有力な手がかりを提供している。

(枚方市)

## 徳川時代の鉦山の珪肺

三浦 豊彦

Ramazini が Modena で「労働者の病氣 (De Morbis Artificum)」を出版したのが一七〇〇年のことであるが、この書物の増補第二版が一七一三年に出た。これはちょうど正徳三年にあたり、わが国では貝原益軒の養生訓が出た年である。養生訓では職業や労働については全くふれていないといつてよい。つまりヨーロッパではやがて産業革命がはじまろうとする時期がきているのに対し、日本の産業革命はまだはずっと先のことであったというちがある。

この Ramazini の出版より早く、延宝年間に佐渡の益田玄皓が紫金丹を金堀の病気に施薬したというが、一般的に当時の日本医学は職業病に無関心だったし、医師の記録にあらわれた煙毒(珪肺)の記載は、多くは聞き書きの程度であって、実際に鉦山の坑内も見えてはいないのでない

かと思われる。

そのなかにあって、大葛金山「金堀病体書」が注目される。これは文化八年（一八一—）年に書かれたもので、金堀の職業病である煙毒の原因を煙のような石粉を吸入するためであり、金堀同様に坑内で働いても石粉を吸いこまなければ老年まで病がないと書いている。鉾石の微塵が原因だと書いている。はっきり原因をつかんでいるし、その後には、珪肺者の症状なども極めて適確である。そこでこの手紙の筆者の荒谷忠兵衛は長く、医師と考えられていたが、実は大葛金山の山主であることがわかったし、この金山ではその後、患者の金堀辰五郎を江戸に送って江戸医学館で診断をうけさせてもいる。坑内では防塵用の「覆面」を使用させたという。

このようにみると、医学は職業病に対し無力であったが、労働する人達の間ではかなり適確に病気がとらえられていたことを意味する。医師のなかでは多紀元堅の対策が、この人らしく興味をひく。

## 日本放射線医学史と技術史の構成

### 私案について

今市 正義

抄録未着

## 中国中世における医者

### 地位について

山本 徳子

わが国の江戸期以前の医事に及ぼした中国中世（蘇内清博士の時代区分に基づく）、ことに唐代のものの影響の大きいことは周知の通りであろう。今、これを、医事制度にのみについて言うと、わが国において、始めて作られた医事制度であるところの医疾令も、その一例であろう。ところが、これは、すでに散佚してしまっていて、諸書に引用されている逸文から、その大体のことを知ることができ、この、もともなったものとしては、唐代、玄宗の時に作られた『大唐六典』が考えられよう。中国においては、これ以前に『周礼』の中に、医事制度に関する資料の始めての記載が見られる。この『周礼』は、中国における制度の理想像を周代に求めた書として知られているが、その成立年代、実施面等については疑問の点が多い。しかし、そこで

挙げられている医者についての名称で、『六典』に見られかつ、医疾令にも現われており、現在に至っても用いられているのは、『醫師』なる語であろう。中国における、いわゆる古代・中世を経て、わが国に移入されてより以来、現代にまで用いられている名称ではあるが、その内容は、当初のものより異ってきているように解せられる。ところが、その変遷については、それらの書には、詳しいことは記されていない。そこで、発生地である中国における『六典』を軸として、それ以前の時代のことをも考慮に入れたつ、『醫師』に関しての像を説明してゆくことも、必要なことではなからうかと考えられる。ゆえに、医事制度をもとにして、歴史書における実態をも見ることによって、医者

者の地位について考察をしたい。

（大阪大教養生物）

## 「医師の誓詞」について

三木 栄

この「医師の誓詞」は、一九四八年世界医師会総会採択の「ジュネーヴ宣言」に準拠したのであるが、改めて、「ヒッポクラテスの宣誓」、その『集録』中の医の自然の理法と医業への箴言、パラケルススの説く医の理念を併せ汲み、また東洋古来の医倫理をも配慮し、これらを一九として、現代の思想に則し、新たに戒律様式の条文して、編成されたものである。一九七二年に拙著『体系世界医学史』「総論」中にこれを収めたが、今回重ねて字句を正して発表するのである。医師の誓詞として誦するに価せば幸いではあるが、これ非才の一老医の試作に過ぎない。諸賢の叱正を切に待つのである。

本発表においては、「誓詞」の淵源と変遷を考え、各条文（英訳を付す）について注釈を加えようと思う。

一、病を医するは、自然である。医なる者は、造化の臣である。

二、医業に携わる者は、全生涯を人類のために捧げ、人間の生命を至上のものとして、尊重しなければならぬ。

三、病者の身心を癒すことが、医師の第一義でなければならぬ。

四、信念・誠実・同情と愛をもって、医療を実践し、人びとから尊敬と信頼を得るようにせねばならない。

五、如何なる強い圧力に逢うとも、人道に反する目的のために、我が知識を利用してはならない。

六、人種・宗教・国籍・政治・経済・社会的地位の如何によって、病者を差別待遇してはならない。

七、病者の打ち明ける総ての秘密は、堅く守らねばならない。

八、我が師を敬い感謝を捧げ、同僚は兄弟と見なさねばならない。

九、生涯を通じ、絶えず医学を修め、医術を磨き、医業

の面目と尊い伝統を守りつつ、その進歩發達に尽くさねばならない。

十、余は医師として、以上を、自由意志により、名誉にかけて、嚴重に誓うものである。

(堺市)

## ニコラース・トゥルプと

### その医学業績

古川 明

ニコラース・トゥルプ Nicolaas Tulp (一五九三—一六七四) はその医学業績よりも、レンブラントの名画で一般に知られている。わが国の蘭学期には、その名が現われなかったようであるが、ブルーハーヴェをはじめ、多くの有名な医師を生んだ最盛期のオランダ医学の基礎をきずき上げた学者の一人と云えよう。演者はさきにレンブラントの解剖の名画について報告したが、その際調査したトゥルプの伝と業績を紹介したいと思う。

トゥルプの本名は Claes Pieterszoon、ラテン名は Nicolaus Petreus である。アムステルダムの家の前がチュールリップの球根の競売所であったことから、Tulp とよばれた。ライデン大学を卒業して医師となったのち、アムステルダムに戻って開業し、一六二八年に外科医組合の解剖学



講師となった。一六五四年にアムステルダム市長に就任し、オランダ政府の事業にも協力し、一六七四年ハーグにおいて、八一歳の長寿でこの世を去った。昨年（一九七四）はかれの死去三〇〇年にあたる。

トゥルプの医学業績を代表するものは *Observationum medicarum libritres* (通称 *Observationes medicae*) である。この書物は当時多くの医師に読まれ、のちに有名な生理学者ハーレルから「金作」の讃辞を受けた。多くの医学記事や興味深い臨床例を掲げ、その病理解剖を重視し、死後の検査と自分の診断を対比検討している。回盲弁の記載图示、人の乳管の発見のほか、脚気、腎結石、ジフテリ、線虫症、ヘルペス、気管支の型、脾の搏動などが記載されている。比較解剖の見地から、類人猿を解剖して人類に似ていることを証明した。トゥルプはまた植物学の知識を応用して、オランダ薬局方の出版にも協力した。

(篠原病院・杉並区)

## 麻酔の初期発展——とくに

John Brown と Thomas Beddoes について

栗本 宗治

亜酸化窒素は Joseph Priestley 1772 によって分離され (“Different Kinds of Air” 1774~5), Humphry Davy によって詳細に知られた。 (“Nitrous Oxide” 1800)。一八四〇年代に臨床に導入され、今世紀以降麻酔の主役的役割を荷ってきた。Pneumatic Medicine のアイデアのもとに Davy に実験を課したのは Thomas Beddoes (一七六〇~一八〇八) であり、その装置は James Watt がつくった。両者の仕事は “Factitious Airs” (一七九六) にまとめられた。Beddoes, DM, Oxon. は John Brown (一七三五~一七八八) のラテン書を訳した (“The Elements of Medicine” 一七九五)。この書は Brunonian Theory として当時とくに欧州大陸において大きい反響をもった。

この間、エディンバラにおける William Cullen (一七一〇～一七九〇)と Brown, グラスゴウにおける Joseph Black (一七二八～一七九九)と Watt, バーミンガムの Lunar Society における Priestley-Watt-Beddoes などの関係が指摘できる。

四八年総会において、麻醉通史に関する諸因子の大意について報告したが、今回は、一、上記著作を紹介し、二、思想的流れならびに三、それらの社会的背景について考察する。

(大阪医科大学・麻醉科)

## X線による消化管運動の

### 研究者キャノン教授

中山 沃

ハーバード大学医学部生理学教授として一生を終えた Walter Bradford Cannon (一八七二～一九四五)はX線を消化器系に利用した初期の研究者の一人である。特にX線を用いて胃運動の観察を行ない、またネコの結腸で逆蠕動を発見したことは特記すべき研究成果であり、横行結腸右半側に認められる緊張性収縮は Cannon's ring として今にその名をとどめている。演者は一九七三年九月ハーバード大学医学部にキャノンの資料の蒐集のため立ち寄った。生理学教室のある建物の中にキャノン記念講堂があり、その一隅に一つの陳列ケースがあり、その中にキャノンの著書その他が展示されていた。また医学図書館の貴重資料保管室には、結腸の逆蠕動発見当時のレントゲンフィルムからトレースした沢山の図が大切に収蔵されていた。キャノ

ンの著書や記念刊行物をコピーする時間がなかったため、これらをエール大学医学部図書館で複写することができた。すなわち一九三一年十月十五日行われたキャノン教授在職二十五年記念会の会誌、死直後の一九四五年十一月五日ハーバード大学医学部で行なわれた追悼式の記録誌、一九四五年発行されたキャノンの自伝および随筆集ともいうべき「The way of an investigator」（副題「医学研究における経験」）の三つである。私はこの諸書およびアメリカ生理学会誌に発表された研究論文その他を参考として消化管運動研究者としてキャノン教授について述べる。

（岡山大・生理）

## 土生玄碩<sup>はなけんせき</sup>のシーボルト散瞳薬

### 伝授に関する一考察

福島 義一

v. Siebold 事件おこって、当時眼科医として幕府最高の地位にあった土生玄碩（一七六二～一八四八）が悲惨な運命をたどった最大の原因が国禁の品（将軍家紋服）を、Siebold に贈与した罪に因ることは周知のところである。

当時、左程極秘の品でもなかった散瞳薬（莨菪、和名ハシリドコロ浸剤点眼薬）の入手を何故、彼が重大な危険を犯して切望したのであろうか。史料をしらべてみると、色々な疑問がからんでくる。

演者は、v. Siebold 伝授散瞳薬のわが国内の伝来過程をさぐり、玄碩に対するこの疑問を解決し、更に、彼が贈与したと思われる紋服発覚の経過を再検討して、玄碩評伝に関する一試論を発表する。

（徳島市）

14

## 江戸時代の腊葉について

矢部 一郎

る。『厚生新編』では第四十九巻の「乾腊花良法」及び第五十八巻の「腊葉帖」、『植学独語』では「西洋にては腊葉のみならず腊花もある事」、『植学啓原』では卷之二の「花」の項である。また、文政十年（一八二七）名古屋の嘗百社の同人が標本を集めるためにその保存法を印刷した。

本来、本草家達は画技を磨いて草木の写生を行なったが、腊葉標本を作つて保存することはあまりしなかつた。腊葉標本を作つても、葉一枚を押葉にする程度であつた。葉以外の花や茎なども揃つた完全な腊葉標本を作るようになってのは、恐らく西欧植物学特にリンネの植物分類を本格的に受容した宇田川榕菴や伊藤圭介達の時代ではないかと思われる。リンネの植物分類は雌雄蕊分類とも称され、雌雄蕊の特徴を主徴として分類同定するものであるから、腊葉標本も花のついたものを必要とする。その為、日本でも、

蘭学系の博物学者達は完全な腊葉標本を作るようになった。

西欧の腊葉標本の作製法を初めて記載した書物は、『シヨメル百科』蘭語本を翻訳した『厚生新編』、宇田川榕菴の『植学独語』と『植学啓原』（天保六、一八三五）であ

ところで、『厚生新編』の「乾腊花良法」の記述と『植学独語』及び『植学啓原』の記述とが非常に似ている。それ故、榕菴は恐らく『シヨメル百科』から腊葉標本の作製法を学んだのであろう。そこで、『植物研究雑誌』第三巻第十二号（昭和元、一九二八）において、牧野富太郎が「伊藤圭介が明治八年（一八七七）に刊行した木版一枚刷りの『草木乾腊法』が本邦で植物の乾腊標本製作法を述べた最初のものである」と述べている事は誤りである。

腊葉という語は『厚生新編』や『植学独語』で最初に使用されたようである。ただし、『植学啓原』には腊花はあ  
るが腊葉の語はない。それ以前の本草家は押葉、葉腊ザンバの語を用いていた。本草家達の著書や腊葉帖などには葉腊や押葉の語をなかなか見出し難いが、平賀源内の手紙に押葉の

語が見られ、前記百管社のものでは葉腊<sup>ワッパ</sup>が見られる。

以上の検討から、本格的な腊葉標本の作成や用語としての腊葉はリンネ分類が日本に定着した時点から始まったものと考えられる。

(武蔵大学生物学教室)

## 最近見出した若干の資料について

(京都の医学史展に際して)

杉立 義一

京都の医学史展開催にあたり主催者たる京都府医師会では医学史展特別委員会を作り京都府下全域に資料を求めた。展示品の中より興味があり且つ未公開のもの若干についてスライドを用いて紹介する。

### 一、医道入門許状

京都府医師会蔵

医道入門之夏令

許容畢向後医術

益励精可有之条

示之以章

天保十五年九月十三日

医道長上 丹波朝臣 圃

中村恒善

### 一、古産科器械

京都府医師会蔵

探領器(睡電器及び奪珠器)、網産科鉗子、穿顛器、断頭器、鉄釣、鈎胞器、子癩破膜器、幕末ないし江戸初期のもの。

一、賀川玄悦肖像画

京都市杉原養一氏蔵

森光惠の賛あり。

一、賀川玄悦墓碑、京都市下京区中堂寺西寺町十七玉樹寺の前庭に玄悦・子啓・子全の三代の墓があり、本堂裏の墓地に四代以下七代までの墓がある。玄悦墓碑は荒廢していたため昭和十八年日本婦人科学会が新墓碑を建立した。

一、産育全書版木

京都市三谷春保氏蔵

水原三折の家系図、三谷梅子旧蔵の産育全書、及び膨大な量の版木が三折の縁につながる三谷春保氏方に保存されている。

一、新宮涼庭顕彰碑、宮津市由良神社境内にあり昭和三十七年十月九日に郷土史家矢田悟郎氏の尽力により建立された。題字は武見太郎氏による。

一、新宮涼庭遺墨、新宮家第四分家の末孫に当る舞鶴市岸本幸男氏方に十数点、また四代前の先祖が涼庭の門人であ

った大宮町谷口謙氏方々に数点保存されている。

一、小森桃塙の陶像、

京都市小森秀之助氏蔵

小森肥後介の文政四年四十歳時の衣冠束帯の坐像で彩色を施し厨子に入っている。

一、京都種痘資料、

京都市鳩居堂蔵、

鳩居堂主人熊谷直恭は嘉永二年有信堂という種痘所を作り種痘を普及させた。

有信堂社中名簿付種痘熟練医師名簿、

種痘願(安政六年)

種痘版画及び版木

蓮心翁祝種痘成功図巻、安政五年十一月十日蓮心翁七十六歳の誕生にあたり有信堂における祝宴席上中西耕石らが合作、富岡鉄斎が明治末年に書きそえた。

一、京都市竹中文一郎氏方押入れより四代前の先祖が集めたと思われる書物が発見された。解体新書(初版)医範提綱、病名彙解・外科真要書・安産幸運録・本草鏡等。

一、峰山町櫛田一郎氏方には先祖が使用したと思われる写本が保存されている。訶倫産科書、産論・産論翼、産科備

要・中条流産科書、産論秘訣・産前産後秘方・及び和蘭文典。

一、京都府医師符号、

宮津市比賀掃部氏蔵。

京都府では明治七年に医務取締制を設け、翌明治八年には医師符合規則を定め診察の際には必ずこの符合（メダル）を胸間に着用せしめた。医師は銀製、医師門弟は銅製とした。この銀製符合は比賀氏の祖父のもので、表面には比賀勝太郎・明治十年七月・甲号・五百十番・裏面には京都府医師符号と刻してある。同規則は明治十四年廃止された。

一、大書入れのある産論翼

筆者蔵。

この本は大判（上・下二十九幅）で各頁とも細字の書入れが余白のない程度にびっしりとかきこまれている。図は普通三十二図であるがこの本には四十九図ある。恐らく済生館の教師用のものと思われる。

（京都府医師会）

## 一 気留滞論と万病一毒論

大塚 恭男

江戸時代にたてられた病因論として最もユニークなものに、後藤良山（一六五九～一七三三）の「気留滞論と吉益東洞（一七〇二～一七七三）の万病一毒論とがある。良山と東洞はいずれも古方派に属するとは言え、医論においても臨床の実際においても相異なる点がきわめて多い。

まず陰陽五行説に対する態度であるが、良山の場合、「コレハ聖人の作故、陰陽五行ナケレバナラヌ者ナリ。然ドモコレヲ人間ノ府蔵ニ分配シテ、イロイロ区分ノ説ヲワリツケ端多クナリ来テ、今日病人ニ根カラアワヌコトナリ」と述べ、陰陽五行は原則的には認めており、ただ金元流の晦渋な理論を排したのであり、この際特に問題とされたのは当然のことながら五行の方である。一方、東洞の方は、「陰陽は天地の気なり、鑿に取るなし」、「今その説（五行）を

とりて、これを匙術に施すに則わち謬を千里にいたす。これ吾党の取らざる所以なり」ときわめて明快である。

また良山は「法を素靈八十一難の正語に取り、その空論雑説文義の通じ難き者を捨て、漢唐の張機、葛洪、巢元方、孫思邈、王燾等の書を涉獵し、朱明諸家の陰陽旺相、府蔵分配区々之弁に惑わず、百病は一気の留滞に生ずることを識らば則わち思い半ばに過ぎん」と古方派としてはきわめて柔軟な姿勢をみせており、その実際の治療にあたっても、卑近な材料を駆使し、民間療法を好んでとりいれるなどむしろ『肘后方』にみられる葛洪の態度に近い。しかも食餌療法を重視し、薬は毒物で外邪に対する備えであり、内傷は肉などの食料によって治すべきことを説いている。

東洞は扁鵲、張仲景のみを師表と仰ぎ、他の一切の古典を排した。また食餌療法にはきわめて冷淡であり、薬という毒物によって、いう所の一毒を除き、飲食は嗜好にまかせるといふ態度であった。

さて一氣留滞説の気は血とともに人体の二大生理因子の一であり、なお言えば血の上位にあって血をも制御する働

らきを持つものである。病気は内因（喜怒など）、外国（寒暑など）、不内外因（飲食不節制など）によっておこされるときも、これによって気の循環が滞って始めて発病するというのがその考えであり、生体側に主導権をもたせているのが特色である。

これに反して万病一毒論の場合、毒という語から既に推察されるが如く、これは外来の因子であり、生体にとって異物である。従ってこれは除かねばならない、という考えであろう。

前者が気の留滞を矯正してその循環を正常にするという考えであるのに反し、後者は毒をとり除いて疾病を治そう、というきわめて対蹠的な理論が古方派を代表する二人の医師からだされたのは興味深い。

（横浜市立大講師）



## 小浜藩における林野家（小石元俊の祖）の事蹟について

田辺 賀啓

関西で蘭学を主唱した小石元俊の祖先は、小浜藩の家老であったと言われているが、これに疑義をもつ論評もある。それは元俊の父市之進が祖先のことを口外しなかったため、後年（寛政十一年）同じ小浜藩の杉田玄白に、元俊が調査を依頼している事や、市之進が小浜藩を退身する際の事情と、彼の経歴年月の不明瞭さの故に疑問をもったのである。

元俊は「余もと将種たり」との誇りをもって一貫していが、果して先祖の林野家（父市之進、祖父作兵衛、曾祖父惣左衛門）は小浜藩の重臣であったか否かを考察する。

小浜藩主酒井家の菩提寺である空印寺の過去帳には、惣左衛門父母、惣左衛門夫妻、作兵衛夫妻、作兵衛の子息と娘（市之進姉弟）

更に小石元瑞の名が見られ、惣左衛門夫妻と作兵衛夫妻

の戒名には夫々に院殿居士（大姉）と誌されている。

小石家現当主秀夫氏が父暢太郎氏より伝え聞いていた市之進の寄進になる燈籠は、藩主酒井家墓所の出入門の前に歴代の家老達の寄進燈籠と共に立って立っていたが、今次大戦後は藩主墓所内に移動され現存している。石面に彫られた文字は、小石家の資料と一致する。

惣左衛門夫妻の墓碑を探索の結果、同寺の無縁墓地内で発見した。これも小石家にある墓碑の写しと一致し、一部欠損した部位も遺された図面と合致している。

明和二年、山口安固が藩祖忠勝公の言行を記した「仰景録」に惣左衛門のことを、又、文政八年、田中貞風が郷土の遺談を収録した「逢昔遺談」に林野家三代の家老の事蹟を述べている。小石家に現存する古文書をも併せ検討するに夫々の身分や人物像を知ることが出来、当時江戸において「林野の酒井殿」と言われた家柄で、元俊の父祖三代は小浜藩の有力な家老であったことは間違いないことと思う。

（公立小浜病院）

## 本木庄太夫の医学

小川 鼎三・酒井 シヅ

J. Remmelin の *Pinax microcosmographicus* を訳したのは本木庄太夫（良意）であることは「和蘭全軀内外分合図」の出版者、鈴木宗云の序文から周知されている。

また、床太夫が蘭館医 *Willem ten Rhijne* の滞日中（一六七四〜一六七六又は七七）に、レイネに日本の医学を紹介し、レイネから西洋医学を学ぶのに通詞として大きな役割を果し、レイネをして庄太夫は通詞の中でも医学の造詣は一頭地を抜いていると言わせしめたことは、すでに岩生成一氏や大塚恭男氏によって紹介されている。

今回は、その本木庄太夫がどの程度まで西洋医学を会得できていたかを、この *Remmelin* の解剖書の訳本から明らかにする。

なお、この解剖書の翻訳のできた時期については昨年十

一月の例会で報告したが、その結論だけを述べれば、現在は天和元年（一六八一）かその翌年と考えている。しかし、これは確定的なことではなく、新資料が出れば、それ以前なる可能性は充分にある。

本木床太夫（一六二八〜一六九七）は本木家では二代目で、はじめて通詞になった人で、名を庄太夫栄久と呼び、寛文四年（一六六四）に三七歳で阿蘭陀小通詞となり、寛文八年（一六六八）に大通詞に昇進し、元禄八年（一六九一）に通詞目付役となり、剃髪して名を良意と改めた。

本木家の由緒書によれば、和蘭人の江戸参府に九回も附添って江戸にでかけている。そのうち記録に残るのは六回で、その最初は寛文七年（一六六七）、次いで寛文十年（一六七〇）、延宝元年（一六七三）、天和二年（一六八二）、元禄二年（一六八九）、元禄五年（一六九二）であった。これはいずれも蘭館日誌から明らかになったものであるが、本木家の記録では天和二年だけ記している。

それは、將軍綱吉の子徳松の要望でオランダ人に踊りを求めたが、踊らないため、庄太夫がそれに替って踊り、つ

づいてオランダ人も踊ったために、將軍より褒美を貰った話であった。この江戸参府をした天和二年の四月中旬に庄太夫の「阿蘭陀経絡筋脉臟腑図解」が誰かに差上げられたことが、昨年、秩父市で発見された同書の写本から明らかになった。

その内容を明和九年（一七七二）に出版された「和蘭全軀内外分合図」と比較すると、後者の図譜で欠落している図の説明の部分が、後者の本文でも欠けていることがわかった。

また、秩父本の本文は北九州市の原三信家に伝わる庄太夫の解剖書の本文とほとんど同じであるところから、本庄太夫の作った解剖図に近いものを原三信家本は伝えているといえよう。

庄太夫は身体の部分の名称はほぼ正確に理解しているが、筋系になると具体的に把握していないためか、非常に混乱している。

内臓は日本語にないところは、原文にない言葉を補って、具体的に表現している。それにはかなり正確な解剖学的知

識を必要とするため、その知識を豚などの解剖に庄太夫が立ち合って得たものか、庄太夫がその単語をオランダ人にならずね、オランダ人の説明をそのまま書き記したのか断定できない。

しかし、庄太夫はレメリンの解剖書だけからでは得られない知識まで、そこに記していたことは確かである。

また、当然のことながら、彼が全く理解できなかった部分も多かった。

（順天堂大学）

## いわゆるターヘル・アナトミア

### (一七三四)の相違について

酒井 恒

ターヘル・アナトミアに少なくとも二種類存在することを岩崎が示唆し、その第二一図の相違を「東大本と家蔵本との唯一の相違点」と述べている。演者も、大鳥蘭三郎氏蔵書の同図が原著者クルムスの序の記載と異なることに気づいたので、同じ一七三四年出版の東京大学総合図書館所蔵および大鳥氏所蔵の *Ontleekkundige Tafelen* (一七三二) および大鳥氏所蔵 *Anatomische Tabellen* (一七三二) および解体新書覆刻版(一九七三)を比較検討した結果、図版は各版ごとに別々に刻版され、また、一七三四年版には少なくとも二種類存在することを確認した。

一七三四年の両版を、活字、各行の相互関係等について詳しく比較すると、挿文、序文、本文等には特に相違はみられないが、図の形、陰影の表現等で扉絵をはじめ全図に

相違がある。大鳥氏蔵書では、特に、第三、九、十二、二一図に著差を認め、第三図は、その内容は同じでも図の配列が異なり、小さい図を主として上方にまとめ、一図の方向が相違し、記号は本文の記載とも異なる。第九図の眼球縦断図では硝子体は白地である。第十二図に唾液分泌管は描かれていない。第二一図には訂正図がなく、図は既に訂正されている。その他の図には、本質的に大きな相違は認められないが、記号の記入、陰影の表現等に細かい相違がみられる。以上の相違点を一七三二年版の図と比較すると、東京大学蔵書の図はこれに類似するが同一の原版ではなく、大鳥氏蔵書の図も原版を異にし、且つ、少なくとも上記四図が著しく異なる。このことから一七三四年の同じ版でも、東京大学蔵書は一七三二年版を蘭訳、刻版したものであり、東京大学蔵書と同一版を漢訳、刻版したものが解体新書であり、大鳥氏蔵書は、図の配列の変更、誤りの訂正等のために、全図を後に(年号不詳)新たに刻版し、増刷の際に活字はそのまま、図のみを差し替えたものと考えられる。また、序の記載と異なり、図を巻末にまとめてある。その

刻版の巧みさは驚嘆に値する。

(名古屋大・解剖学)

## コンスブルック内科訳書について

阿知波 五郎

旧長藩旧蔵本のうち、コンスブルック(Georg Christoph Consrbruch, 1764~1827) 本の訳業について述べる。青木周弼が宇田川榛斎の素志をうけてコンス本の訳業をしたかの問題に触れたい。資料は同藩旧蔵本(旧藩の蔵書印がある)の六部である。すなわち、

- 一、『昆斯内科治論』和蘭、紀元一八二一年鏤行上編 一〜一三(五冊) 下編一〜一八(八冊)(写本)
- 二、『昆私痢篇』(袖珍内科治方書、前篇卷二)(一冊)(写本)

- 三、『工私貌爾觚・内科総論』墨扁注釈・和蘭一八二五年鏤行(一冊)(写本)

- 四、『西医原病略』説本于工私蒲略屈  
兼取扶歎郎度言篤斎先生訳述・(一冊)

(写本)

五、『秦西内科集成』前編一、二、三(欠)、四、三冊後  
篇一、二(欠)、三、四、五(欠)、六、四冊(共に写  
本)

独乙都蘭土 工私貌爾觚著述

和蘭 滅辺

補註

日本東都 小関三英

補註  
訳述

六、Geneeskundig Handboek voor praktische Artsen  
door G. W. Consruch, naar het Hoogduitsch,  
door N. C. Meppen. Erste Deel. Tweede veel  
vermeerderde Druck. In AMSTERDAM bij R. J.  
Berntroop. MDccc XXIV (表紙に『昆斯内科治論』  
とある)。

第二巻は発行年代が一八二一年で、むしろ古い。「両巻  
共に読破した跡が見られ疑問符がついている。

以上六部の資料によって青木周弼らがコンスの訳業にタ  
ツチしたか否かの確証をえられなかったが、傍証からタ  
チしたのであろうことを検討する。

(京都市)

## プレんキの婦人病論の原書と

### その日本語訳書との比較検討

大鳥蘭三郎

船曳卓堂の「婦人病論」はプレんキの婦人科書を翻訳し  
たものと、これまで言われているが、それは直ちにはそ  
う言い切れないと思う。その論拠を訳本と原本を比較検討  
した結果を述べながら明らかにしたい。

訳本にはプレんキの本を訳したとは明記されてなく、た  
だ一八〇九年に出版された産科書とあるだけである。

また、プレんキの原本では題が産婦人科書とあり、本文  
は婦人生殖器の構造から始めているが、船曳の「婦人病論」  
ではそれがみられない。

(東海大学)

## 宇田川榛齋著「内外要論」について

大滝 紀雄

私はふとしたことから、津山藩宇田川榛齋著「内外要論」という一書を手に入れることができた。本書は刊本でなく

て写本である。宇田川榛齋（玄真）には「医範提綱」「和蘭薬鏡」「遠西医方名物考」「増補重訂内科撰要」等数多くの著書がある。しかし彼の著書目録や大学図書館等の古医書目録を通覧しても、「内外要論」なる書名は見当らない。本書が果して玄真による著書であるかを先ず確かめる必要があり、彼の著書であることが確定すれば、いつ頃の作品であるかを知りたい。

本文二九葉と附録の薬方一二葉合計四一葉すなわち八二頁からなる小著である。一頁一九字詰九行で、文体は返り点つき送りがななしの漢文で書かれている。日付は残念ながら何処にも記されていない。

本書を開いた第一頁の内外要論という表題の下に、随円形で囲まれた大同薬室蔵記と記された朱の蔵書印が押されている。大同薬室は浅田宗伯（一八一五—一九四）の門人で神官の中野康章の書齋の号といわれる。中野は傷寒論入門、素問入門等の著者森田幸門（一八九二—一九六六）の師であり、この印のある書物は第二次大戦以後市場に多数出廻ったということである。

本文は総論、性質、病毒、病因、診察、治法、薬能、方剤、分量製法、養生、解蔵、精神の一二項からなっている。

内容は目下検討中だが、扁鵲、ヒポクラテスあり、漢人と蘭人の考え方の比較、カマイタチ、シケウルボイク、神経、精神、漢人の魂、蘭人の運化神などの語があり、いかにも玄真の著らしい点が多い。

皆様の御教示を仰ぎたい。

（横浜市）

## 江馬元恭『泰西熱病集訳』について

当時の熱病についての考えや治方を考察したい。

(愛知県)

安井 広

『泰西熱病集訳』が出版されたか否かは明らかにし得ないが、大垣市江馬家に現存する稿本は五冊から成り、そのうち三冊は筆記原稿の間に、印刷された部分をはさんで綴じられている。印刷された部分は卷上四九丁、卷中四三丁、卷下は五二丁である。これらはいずれも頭註が書き入れてあったり、本文を添削したりしてあって、これが校正の段階のものであることがわかる。しかし初めに訳序が記され、文化十四丁丑年臘月□日美濃江馬元恭と筆記されているところから、すでに翻訳は完了して出版できる状態にあったとみることができる。二年前文化十二年には夫古撒譙の著書を吉田成徳が訳した『泰西熱病論』が刊行されているが、江馬元恭の訳書には弗吉作無のほかは蒲剛、栗瑟、暴伊先、蒲蘭瓜律、その他の著書からの引用が多い。この書により



## 緒方洪庵の書翰二通

岩治 勇一

東大名譽教授、緒方富雄博士を中心に、藤野恒三郎阪大名譽教授、海溪阪大文学部教授が協力され、洪庵書翰の複製解説編纂がすすめられている。

大野見在のもの七通は、旧藩家老、内山家に所蔵されるものであるが、今般現当主の依頼によりその書翰の確認をした折、全文未公開のもの二通の借覧を許されたので紹介する。

(1) 年代推定は両書翰共安政三年（一八五六）。

(2) 慎蔵は伊藤慎蔵で緒方洪庵の高弟。安政二年十二月大野著、翌三年五月開館の大野洋学館蘭学教授。

(3) 平三（次男・洪哉・惟準）四郎（三男・城次郎・惟孝）洪庵悱。

(4) 老人は億川百記（医師）で洪庵夫人・八重の父であ

る。

(5) 内山七郎右衛門は越前大野藩（藩主 土井利忠）の家老。藩経営の商店「大野屋」（北久太郎町）への暫々上坂。

(6) 当藩の記録「御用留」（安政三年丙辰正月）に次の記がある。

「六月晦日

一、伊藤新蔵方へ億川翁助と申者罷越逗留為致度趣順八郎を以相願仰通及挨拶

一、同人方江大坂師匠緒方洪庵悱兩人罷越当分学文修行為致度趣届有之候

緒方平三  
同 四郎

（福井・大野市）

## 林洞海の晩年

土屋 重朗

「大日本人名辞書」によると、林洞海の晩年は「(明治)三年中博士に任じ従六位に叙せらる。尋で大阪医学学校長となる。十二月権大典医に転任し皇太后附と為る。九年四等侍医に転任し正六位に叙せらる。後退隠また出でず。二十八年二月二日病を以て歿す。八十三」とある。

洞海の退隠後の所感と小倉の旧友篠田蒼海にあてた十二通の書簡を先般読む機会があったので、それらから洞海の晩年をしのびたいと思う。

洞海所感は「明治十二年十月十八日東京大学医学部学位授与式手続」という一枚に印刷した大型の書状の裏に毛筆で書かれたものである。「学位授与式」は東大医学部第一回卒業生について挙行したもので、これに洞海も来賓として招待された。時に六十七歳。所蔵の内容は自分が若い時

洋学を学んだ当時を想起し、現在の医学の進歩発展に思いをいたし、更に将来の進歩を期待するというもの。

つぎに書簡類はすべて切手がはぎとられ、年の分らぬものが多いが大體明治十二年から二十二年ごろまでと思われる。即ち洞海六十七歳から七十七歳位までの間に篠田蒼海にあてたもので、大部分は物品の授受、贈与、時候のあいさつ、人の紹介等が主な内容だが、中にはコレラに関する見解やグラント將軍の人物評もあり、長男研海を思い起して書いたような文も所々に見出すことができる。

洞海は子沢山でしかも養子もあり、皆優秀で一見幸福そうに見えるが、明治十五年に研海等を失ったことが余程こたえたらしく「已に喜年と相成り人は芽出度と称し候得共子供等におくれ候を自ら願れば是れ長寿の不幸ニテ嘆息ニ御座候」と蒼庵に書き送っている。また山里に隠棲して和歌にふけり、鳥の声を楽しみ草花の培栽に自らを慰めている。

(静岡・清水市)

## 「貌氏成形手術図譜」と小山内建

星 栄 一

第一表、造頷諸手術式（五図葉全二十九図）

第二表、兔唇諸手術式（二図葉全九図）

第三表、造唇諸手術式（九図葉全五十一図）

第四表、造唇諸手術式下唇（七図葉全四十四図）

第五表、口唇及頷諸手術式（五図葉全三十図）

である。以上のごとく、その内容は頬部・口唇・頸部の局所皮弁による再建修復が主である。

小山内は本書の自序の中で、「外科手術ノ未ダ、尽クサザル所ヲ補ワントスル也」と述べて、本書発刊の意義を説いている。

表題の貌氏とは誰れを指すのか、その原著は何か、現在のところ不明である。本書が発刊された頃には、すでにリスターの制腐法やクロホルムの全身麻酔法は一般化していたが、本書の内容をどの程度まで実際に行われていたかは疑問である。しかし、本書により形成外科的再建術が啓蒙されたことは明らかである。

小山内建は、明治五年に「眼科約説」全三巻、次いで明治七年に「丹氏察病学」全四巻を、明治十五年に「打聴診

Plastic surgery の日本語訳は、明治八年石黒忠憲が「外科説約」巻十八、二丁の不具の頃に「接癒術」として紹介したのがはじまりである。明治十一年、佐藤進が「東京医事新誌」第三十七号・六頁に「頑固ノ潰瘍ニ表皮ノ細片ヲ種接セシ治験」として、わが国最初の植皮例を発表したなかで、「形成手術」という語をはじめ用いている。

明治十五年に広島で、小山内建抄訳による「貌氏成形手術図譜」が刊行されている。現在、国立国会図書館に一冊所蔵されている。B6版の大きさで、後年製本をし直したらしく、茄子紺のレザー表紙の洋本で、背表紙下方に「帝國図書館」の文字が刻印されている。本文は五十六頁で、右頁に図の説明があり、左頁に二十八葉の図が石版画で印刷されている。その構成は五部に分かれ、

法便覧」全一枚と「貌氏成形手術図譜」全一卷を著わしている。彼は、明治十年より西南の役に、第四旅団軍医長として従軍しており、その際にこれ等顔面再建外科の必要性を認めたものと考えられる。小山内は、明治十八年二月二十六日日本書発刊より二年七カ月後に三十八歳（一説に四十歳）で急死している。

この図譜は、わが国で刊行された形成外科図譜としては最初のものであるが、彼が若くして急逝することなく、その後も活躍を続けていたら日本の形成外科の歴史も変っていたのではないかと考えられる。

（聖マリアンナ医科大学形成外科）

## 宮城県における明治初期の

### 医学教育と横山謙介

山形 敏一

明治四年七月廃藩置県の後開設された宮城県立医学所は明治五年八月の学制公布によって廃止されることになったとき、中目斉、石田真らは県より借用して共立病院の附属学舎としたが、六年三月横山謙介らは、県より借用して私塾として共学義塾と改称した。横山は氏家習とともに英語を教えたが、生徒の同盟休校によって瓦解したのち、共立病院の塾舎の教授主任となった。

横山謙介は弘化元年桃生郡中津山村高須賀の農家に生れ、幼名を金子辰治と称したが、近所の土分（銃手歩卒）横山五郎兵衛の養子となり、遠田郡涌谷の医師大橋道謙に入門して横山謙介と改名した。文久二年十九歳のとき江戸に出て緒方洪庵に蘭学を学び、さらに元治元年長崎に遊学して

精得館のボードウィンとマンスヘルドに学び、英通詞何礼之助に英学を学んだ。慶応二年京都守護職松平肥後守に召出されて京都で英学を教授し、明治四年一関藩知事田村氏に呼ばれて英学を教授し、明治六年共立義塾を創立したのであった。

横山は明治十一年四月より翌年一月まで東京大学医院に留学して帰仙したのち、明治十三年気仙沼病院長、十五年には刈田病院長を在任したが、十七年仙台に開業して流行医となり、大正四年六月五日七十二歳で没した。

横山は明治十一年六月東京大学に留学中に米国紐育府医学校教頭オースチン・フリントのトリーチス・オン・ゼ・プリンシプルス・エンド・プラクチス・オフ・メヂシン（一八七三年、第四版）を訳述して「普氏心臟病論」（三冊合巻）を著わし、緒方惟準、桃生軒蔵版として出版した。巻之一は心臟の炎症、巻之三は機能病、巻之二はその他のものであるが、本書を検討すると、当時の心臟病学のレベルを知り得るとともに横山の英学の素養をうかがい知ることが出来る。

（東北大・医）

吉田 顕三（一八四八・四・八）

一九二四・三・一）のこと

丸山 博

昨年（一九七四）は吉田顕三が没後五〇年にあたる。

大阪大学医学部の教授会が開かれる会議室の壁面には、大阪医学校の開校以来（一八六九―明治二）の著名なオランダ医師二人の他、日本人の校長三人の写真がかかっている。この三人のうちの一人が吉田顕三である。

日本の医学校の前身は主として藩医学校が多かったが、大阪では私塾「適塾」一八三七―天保九―一八六二―文久二）が緒方洪庵（一八一〇―文化七―一八六二―文久二）の名とともに有名な蘭学塾であった。この適塾の出身者（一八五五―安政二―一八五八―安政五）であった福沢諭吉（一八三五―天保二―一九〇―明治三四）は、慶応義塾を創立（一八六八―慶応四）し、英学を鼓吹した。明治政府が医制をドイツに倣って（一八七四―明治七）から

は主として新しく外国人医師をドイツに求めた。

大阪医学校は始め（一八六九―明治二）オランダ系医学であったが、吉田顕三が校長になったとき（一八八一―明治一四）からイギリス系医学に改変され、彼がやめるまで（一八八九―明治二二）つづき、清野勇が校長になってからはドイツ系医学にかわったと一応仮説をたててみた。この明治二二年は、いろんな意味で、私は重視するが、それは別の主題に属するから省き、大阪医学校のその後のことは「大阪大学医学伝習一〇〇年史（一八六八―一九六九）」にゆづる。

本報告では吉田顕三については、海軍軍医時代（一八七二―明治五）一八八一―明治一四）大阪府立病院長兼医学校長時代（一八八一―明治一四）一八八九―明治二二）を前期とし、後期は彼が病に冒された一九〇九―明治四二年で二区分して、論述する。最後の期における、彼の業績は第二六回日本人口学会で報告した（昭和四九年度会報第二〇―二二頁所収）が今回は医人の全生涯について、彼の業績を概説する。

その理由は、日本医史学会で吉田顕三のことが、これまでに報告されることがないとの由、また彼の没後五〇年にあたり、後学のもの先学の志を明らかにしたいからである。（一九七四、一一）

参考資料：① 天僕随筆・回想録（大正一三年刊、非売品）

② 弘濟日記（手記）

③ 保寿利国論（大正二年刊）

④ ヒポクラテス（全）（大正三年刊）

⑤ 聖運録（手稿）

（大阪大・医）

## 本邦海軍々医制度史序説

長門谷 洋治

明治三年六月、東京芝高輪に海軍病院が設置され、兵部の管下におき、海軍に関する医務衛生を扱かうこととした。当時の医官数は軍鑑乗組の者を合しても十名内外であったが、翌年末には二十二名となった。明治五年二月に海軍省がおかれ、同十月には海軍々医寮がおかれ、ここに海軍々医部の制度が確立し、同年末には医官数も四十二名となった。当時軍医寮の事務面を軍医権助・石神豊民が、海軍病院長として治療面を五等出仕・戸塚文海が管掌した。明治六年、軍医寮および海軍病院を芝高輪台細川邸跡に新築し、同年十月には英国より William Anderson (一八四二～一九〇〇) を招き、軍医寮における生徒の教育と海軍病院における患者治療にあたらしめた。同九年八月、海軍省の制度更改で、軍医寮が廃され、海軍医務局がおかれ初

代局長に海軍大医監・戸塚文海がついた。これ以後文官たる医官は廃止され、医官はすべて軍医と呼ばれるに至った。十三年、海軍々医学舎は第一回の卒業生を出した。Anderson は同年、その任を果して帰国。同年末、英国に留学中であつた高木兼寛が帰朝、中医監・東京海軍病院長に補せられた。従来より海軍および海軍々は英国に範をとるところが多かつたが、高木の登場でこれは確固たるものとなった。明治九年医官の数は五十七名であつたが、十五年には七十八名となった。

わが国の戦前の医学・医療を語るとき陸軍のそれとともに軍隊医学・医療というものの存在は看過することができない。ことに海軍は英国式という独特な道をとっており注目しにくい。その歴史は必ずしも十分に調べられていない。とはいえず、また敗戦のため資料も少なくなり研究者も少ない。今後の研究の進展に期待するところである。

〔文献〕 海軍軍医会五十年史、海軍軍医会、昭和七年。

(日生病院皮膚科)

## 解体新書について

小川鼎三

杉田玄白、前野良沢らの苦心の作、解体新書五冊本が江戸の須原屋からでたのが安永三年の八月であります。西暦では一七七四年の九月から十月の初めに当ります。今から正に二百年前でありますので、それを記念する行事がこの一週間にわたり東京で開かれますのは解体新書の出現が日本の学術史の上で大きい時代を画したからであります。その本を出した須原屋は室町三丁目というのですから、この三越本店にごく近い所にあったと思われる。

ここに古ぼけた解体新書五冊をもってまいりました。だいぶ手あかがついています。また翻訳の原本であるドイツ人クルムスの解剖学表 *Anatomische Tabellen* も持参しました。但し第四版の増刷（一七五九年、ライプチヒ版）であります。

一七七四年の時点で世界の大勢を少しうかがってみましょう。日本は徳川第十代將軍家治の時代で、田沼意次（明和六年八月老中格、同九年一月老中）が権力をふるっていました。隣りの中国は清の乾隆帝の治世であります。米国は独立宣言が一七七六年ですが、その少しまえ一七七四年九月に第一回大陸会議が開かれています。イギリスでは産業革命がすでに始まっており、プリーストリーの酸素発見が一七七四年です。フランスではルイ十六世がこの年に即位して、その十五年後にフランス大革命が勃発します。ドイツではプロシアのフレデリック大王（フリードリヒ二世）が勢いをふるい、文豪ゲーテの「若きヴェルテルの悩み」が一七七四年ヴェツラーにて書かれています。



さて本論に入りますが、解体新書について全部お話しすると長くなるので、いくつかの話題をとりあげて申しあげようと思います。

まず「ターヘル・アナトミアの奇遇」という仮りの題で初めの一節を述べます。明和八年三月四日（太陽暦は一七七一年四月十八日）の小塚原腑分が解体新書の生れるきっかけをなしたことは有名ですが、その日の朝、小浜藩医の杉田玄白、同じ藩医の中川淳庵は中津藩医の前野良沢と浅草山谷の出口の茶店で、ぐあい良くおちあいました。ぐあい良くというのはこの日に腑分があつて見学できるとは、全く突然な知らせを玄白が三月三日の夕刻に町奉行の家臣から受けたので、電話のない当時かれは大急ぎであちらこちらに知らせた。平素あまり交際していない良沢にも手紙を書き辻駕の男に頼んでとだけさせました。

だから良沢が四日の朝、指定の場所にでるかどうかは玄白にも確信がもてなかつたと思います。しかし良沢はそこにやってきて、しかも先年長崎で手に入れたといつてオランダ語の解剖書一冊を懐中からとり出して皆にみせた。玄白と淳庵をはじめ一同が驚いたのは玄白が最近に江戸でやつと藩の金で買ってもらい、その場に持参した解剖書と同書同版であつたことです。「誠に奇遇なり」といつて互いに手をうって喜んだと蘭学事始にあります。どうしてこの奇遇がおきたかを考えてみたいのです。同じ本が二冊かれらの手にあつたことは写真もゼロックスもない当時、それから始まる彼らの翻訳事業において甚だ都合のよいことでもあります。

良沢はその本を長崎留学のときに入手したというのですから明和六年の末か翌七年の初めのことでしょう。玄白が一冊を入手したのは明和八年の春で小塚原腑分の直前であつたと思います。

さて、どうして浅草山谷の茶店で二冊のターヘル・アナトミアの奇遇がおきたかという点、この本が初学者向きに甚だ良くできたもので、欧州でも需要が大きかつた。そこでオランダ人は日本人の好みそうな商品ないし贈り者として見計

でこれを舶来したと思います。おそらく日本の側から特に注文したのではあるまい。従って良沢と玄白がもっていた二冊だけでなく、もっと多く来ていた可能性があります。またターヘル・アナトミアは一七三四年の出版だから、良沢や玄白の入手までに三十六、七年を経ており、古本の部類だったかも知れない。

もともとこの本はドイツ人ヨハン・アダム・クルムスが初学者や外科医のために解剖学を簡單明瞭に説いたもので、図譜といふべきものです。ドイツ語で書かれて初版が一七二二年にダンチッヒで出たのですが、評判がよくて改訂第三版が一七三二年にアムステルダムで出ました。その第三版をライデンの外科医ヘラルツス・ディクテンがオランダ語に訳して、オントレイトクルデイヘ・ターヘレン（解剖図表）と題して一七三四年アムステルダムで出版されたのです。そのほかラテン語本やフランス語本もできていました。そういう便利で、内容のよい本だったので、オランダ人が見計らいで少くとも二冊は持ってきて、良沢と玄白の手に入った。その二冊が明和八年三月四日の朝、お互いに相手がその本を持つことを知らないで、浅草山谷で鉢合せしたのは奇遇でした。

\* \* \*

その三月四日に彼らが小塚原で何を見たか、ターヘル・アナトミアの図と較べて彼らがどう考えたか、帰り途に玄白と良沢と淳庵の三人がどんな約束をしたかは蘭学事始でよく知られたことです。その翻訳はひじょうに困難な仕事であった。翻訳のなされた場所が築地鉄砲洲の良沢の家（中津藩主奥平氏の中屋敷）であったから、いま聖ロカ病院のそばに蘭学創始の記念碑が建っています。しかし訳文を何とかまとめて解体新書を作りあげたのは玄白であり、彼はそのとき神田浜町三ツ又みつまたという所にある小浜藩主酒井氏の中屋敷に住んでいました。いまの中央区浜町三丁目であり、この三越本店にわりあい近い所です。

その翻訳の進み方が初めは処女のごとく、終りは少し誇張すると脱兎のごとでなかつたかと思えます。初めの一年間は大きいてこずったが、その後はわりあい速くいったようです。安永二年の正月に出版された解体約図、同じく安永二年

正月付で玄白が奥州一の関の建部清庵にあてた手紙、また同年三月に良沢と玄白が本石町の長崎屋で、オランダ大通詞の吉雄耕牛に解体新書の草稿をみせて序文を請うたことなどでその速さが推測できます。

\* \* \*

つぎに解体新書の内容をしらべてみます。まず吉雄耕牛の序文が載るが、これがなかなか重要で、この解体新書は良沢と玄白の合作であると明言しています。そして耕牛はその原稿をみたが原文と少しもちがわない正しい訳文であると感嘆し、前代未聞の大事業を成しとげたと激賞しています。この激賞は当然ですが、訳文に少しもまちがいが無いというのはいい過ぎで、耕牛が全体を原本と照し合せなかつたことを示しています。しかし序文などにはありがちな誇張でありま  
す。私は当時第一のオランダ語通である耕牛が長崎でもシターヘル・アナトミアを訳したら、これ以上のものができただ  
うかかに興味をもつのです。その次に「自序」として原著者クルムスの第三版の序文がダイクテンの蘭訳を介して日本訳  
されていますが、この訳が甚だまづいことが有名です。このまづい訳文は玄白じしんの作と思われま  
す。しかし玄白はそ  
のまづいことを充分に知っていても責任を回避しないで、終りに「若狭侍医 杉田翼謹訳」と自署して、印を二つも押し  
てあります。彼のつよい気概が感ぜられるのです。クルムスをオランダ人と考えたようですし、「和蘭開国来千七百三十  
一年」は西暦の誤りであります。

その次の「凡例」は玄白じしんの文章であり、内容が実にりっぱで、彼の学問に対する真剣な気持が行間にあふれてい  
ます。凡例では西洋の医学が解剖学を基にしているので、従来の漢方にくらべてはるかに優れているとして、「蓋し蘭書  
の解し難き所は十が七に過ぎず、而して漢説の采るべき所の者は則ち十が一に過ぎざるのみ」とあります。オランダ書を  
自分が理解できるのは三割というのですから、漢説が役だつ一割とくらべて、その差は二割だが、人の生命をあずかる医  
者にとってこの差は大きい意義をもつ。そこで同志の人々と力を協せてオランダの解剖書を訳した。「ああ余の業のここ  
に及ぶ。実に天の寵靈を藉るなり。あに人力の能く致す所ならんや。天下のこの道に心ある者には、則わち我わが竊ひそかにに自ら

郭隗に比す。これを以て四方の譏そしりを受くるが如きは辞せざる所なり」とあります。

凡例の終りに「凡そこの書を読む者は宜しく面目を改むべし……」とあり、今までの漢方の行き方ではだめだとして、「世に豪傑の士ありと雖も、汚習、耳目を惑はして、いまだ雲霧を披ひらきて青天を見る能はざるなり。……」その青天を一部でも見ることができたのは自分であるという。「余の不才、断々として他の技なし。ただ独りこの業における専精以てこれを明すことを得たり。誠に古の人に慙ひづることなし。……然りと雖も、余文辞に嫻なはず、故にこの書において姑しばらくくその意を達するのみ。読む者、解せざる者あるが如きは、余の生けるに迫おそばこれを質訪して可なり」。矢でも鉄砲でもこいと意気軒昂であります。

また訳に翻訳と義訳と直訳の三種を区別しました。オランダ語でベンデレンというのは骨だから骨と訳す。これが翻訳です。カラカベンというのは骨の軟かなものである。カラカは兎が物をかじる音の如きものであり、ベンはベンデレンの略語だから、ここでは軟骨という新用語をつかった。これが義訳の一例である。またキリイル（後に腺という国字ができる）は「語の当つべきなく、義の解すべきなき」ものなので、機里爾と書いてキリイルと仮名を付ける。これが直訳であります。

その義訳の傑作の一つが「神経」であって、それまでの紅毛外科書ではオランダ語をそのままにセイヌ、世奴、セイニ―などと呼んでいたのを、玄白は神気の神と経脈の経を合せてこの新用語をつくり、解体新書で初めて公表したのであります。つまり義訳の一つです。

\* \* \*

本文四冊各巻の初めに杉田玄白訳、中川淳庵校、石川玄常参、桂川甫周閱として四人の名が並んでいます。その上方に日本とあります。玄白は中国の人にもできたら読ませたいと考えたようです。全部が漢文ですが、送り仮名、返り点がついて日本人に読みやすい文章です。四人の名前の中に前野良沢の名がないのが淋しいのですが、良沢は持ち前の学者的良

心からこの不完全な訳本に名前を出すことを拒んだのではないかと思われまゝ。玄白は訳が不完全でも一日でも早く出版するという考えだったので、この結果になったと思います。翻訳の指導者は良沢ですが、解体新書の作者は明らかに玄白であります。

解体新書はターヘル・アナトミアの脚注を除いた本文のみの逐字訳を基礎としていますが、いま調べると訳のまちがいが所々にみられ、「この語解せず」とかぶとを脱いだところも四カ所あります。また「翼按ずるに」(翼は玄白の本名です)の文が所々に挿入されています。玄白が中国の本やクルムス以外の洋書を読んで考察したことがそこに書かれています。巻之二の眼目篇や耳篇では中国の明末の方密之の著「物理小識」や宋代の沈括の著「夢溪筆談」などの説がとり入れられています。また面白いのは巻之四に自分はイギリスの産科書をみたが、(英語だから)その文章は読めないが、図をみると子宮内の胎児が頭を下にし倒居している。それでないと難産の様子である。これは日本では賀川子玄がすでに述べたことと一致するので自分は驚いた。玄白はそれまでは賀川子玄の説を疑っていたが、子玄の偉さが初めてわかった。「学者はその見ざる所を以て疑を生ずることなかれ」と述べています。

すなわち解体新書はただの訳本でなく、玄白の訳著ということが出来ます。ターヘル・アナトミアは豊富な脚注をもっています。玄白らはそれを捨てて大きい活字の本文だけを訳しました。これは賢明なやり方で、もし彼らが小さい活字がぎっしりと詰っている脚注まで全部訳そうしたら、完了までに十年近くかかったかと思われ、協同作業ですから途中で挫折するおそれがあります。それに当時の日本人に西洋の解剖学を紹介するにはあまり詳しくないものがよかったです。

企画の良さはさらに付図に関していっそう發揮されています。図を描いたのは秋田藩士で角館の人、小田野直武ですが、図の選択はおそらく玄白が主になり、彼が何人かの同志と共にしたことと思われます。ターヘル・アナトミアの図は扉絵と骨の一部を除いて全部採用していますが、それではなお不足と考えたようで、数種の西洋解剖書から図をとり入

れて内容を豊富にしています。ターヘル・アナトミア以外の本から採用した図には符号がつけてあって、その符号でどの本から採ったかわかるようにしてあります。それらの本の所有者の名まで凡例の中で示されているので用意周到です。

付図の最初にある扉絵はどの本から採ったと指示されていないが、ターヘル・アナトミアの扉絵とは全く異なるもので、裸体の男女が左右に立ち、上部中央に王冠と紋章のある楯があり、また中央に「解体図」とあります。この図柄はスペインのワルエルダという学者の著わした解剖書で、アントワープのプランティン書店から出されたものと甚だよく似ており、小田野直武が玄白らから頼まれて、他の付図と共にこの扉絵も毛筆をもって模写したものと思われまます。

\* \* \*

結びの言として解体新書はターヘル・アナトミアの本文の逐字訳ではあるが、甚だ要領よくできていて、原本と異なる点も多い。当時の日本人に西洋解剖学の大体がよく分るように作られている。前野良沢の語学力と杉田玄白の計画がよく溶けあつた良書であるといえる。

また玄白がこの一書によって日本の医学の流れを根本的に変えようとする気迫がみなぎっており、蘭学創始の金字塔となつたのであります。

以上は昭和四十九年八月十七日に第75回日本医史学会と第16回蘭学資料研究会の合同大会の時の特別講演として、日本橋三越劇場で行つたものをまとめたものである。

(順天堂大学客員教授・日本医史学会理事長)

## 解体新書出版から二百年

緒 方 富 雄

一

わたくしの演題はいろいろの意味にとれるかとおもいます。たとえば解体新書そのものが出版されてから二百年のふるさになつたともとれましようし、解体新書の出版という仕事が二百年のあいだにおよぼした影響ともとれましよう。わたくしはこの二つの見方のいずれも、大きい意味があるとおもっております。解体新書が出たということにどういう意味があるかということとは、小川教授がふれられましたし、ゲルケ教授はクルムスの解剖書のその後の発展の様子をくわしくはなしになりました。わたくしもわたくしなりに、解体新書が出版された時代のことをすこし考えてみることはじめたいとおもいます。

二

わたくしはまず解剖図のことをとりあげたいとおもいます。小川教授は本木良意（一六九七没）の「和蘭全軀内外分合図」と山脇東洋（一七〇五〜一七六二）の「蔵志」（一七五九）の図を示されました。良意の方のは、ドイツ人ヨハン・レンメルン（Johann Remmelin）の原著 Pinax Microcosmographicus（ラテン語）を蘭訳したもの（一六六七）を自  
由な形式で訳したものです。それが版になったのは一七七二年ですが、手書き本は解体新書の出版（一七七四）よりずっ

とはやくできていて、写本も多少あります。ただし翻訳といいますが、解剖名を少々ならべたようなもので、図の方は各内臓の図をその形に切りぬいて、その一部を順序にかさねてはりつけ、扉を一枚ずつひらいて内部（内臓）を見るようにつくったものです。良意の手書き本の写本はひろく流布した形跡はなく、蘭学事始を見ましても、玄白たちがこれを見た様子はありません。またこの全軀内外分合図は、どちらかといえば、好奇の心をみたしてくれる程度で、解剖書というほどのものではありません。

ですから杉田玄白の場合には、結局山脇東洋の「蔵志」とそれをめぐる図のいくつかが問題になるだけだともいえます。それについても、これらの図を見て痛切に感じますのは、いかにも日本人が日本画風にかいたものだということがあります。対象をよく見つめて、それを忠実に写生するというのではなく、よく見つめたかもしれないが、それを自分の持ちあわせた伝統的な日本画の手法でサツサツとかきあげたという風です。もっとも日本画法といいますが、すべてがこんな手法とはかぎりません。たとえば、ちょうどおなじ時代の円山応挙（一七三三〜一七九五）などは、すばらしい写実画家で、動物や植物のスケッチを見ますと、西洋の写実画家と肩をならべるほどリッパなものです。ところが山脇東洋の「蔵志」の図をかいたのは、そういう人ではなかったのです。そんな図でもなお、小川教授が最初に示された中国の本人体内臓の図よりましであったとはいえましょう。しかし、どうも蔵志の図から実物が想像できるというほどの説得力はありません。中国の図にかかれた人体構造とちがっているようだとすることはわかって、図を見て「なるほど」とおもわせるまでの力はありません。

### 三

そういう点では、クルムスのターヘル・アナトミアの図は、はるかに強く実物をおもいうかべせます。そういう説得力があります。ゲールケ教授のおはなしでは、クルムスの図は、他から引用したもののほかは、みな自分でかいたものだそう



で、おどろきました。わたくしはそのことを知りませんでした。とにかく玄白たちは、明和八年三月四日（一七七一）江戸小塚原刑場で腑分を見たとき、クルムスの図はほんものと寸分ちがっていないと感動するほど写実的にみえた。いまわたくしが見ますと、かならずしも全部がそれほど写実的とはおもいませんが、そのころまでの中国や日本の人体構造図とくらべれば、決定的に、実物の方にはるかにちかいです。玄白・良沢・淳庵たちが感激したのは、ここだろうとおもいます。

#### 四

人体構造図ということから申せば、ゲールケ教授のおはなしにも出てきましたが、アンドレアス・ベザリウス (Andreas Vesalius) (一五一四～一五六四) の「人体の構造について(七卷)」(De humani corporis fabrica libri septem) (一五四三) の六六〇ページを超える大判の本に三百をこえる見事な写実的な図があります。図は有名なイタリアの画家ティチアノ (Tiziano) (一四七七～一五七六) の弟子のカルカール (Kalkar) がかいたものだそうです。このベザリウスの解剖書が出て、これまでのいいかげんな人体解剖書の図は一挙に無価値になりました。それからは、不正確で非写実的な解剖図は、学術的には問題にならなくなりました。たしかに大革命です。

ここで指摘したくおもいますのは、ベザリウスの解剖書の出版が一五四三年という遠いむかしのことであったという事実です。クルムスの蘭訳(ターヘル・アナトミア)ができたのは一七三四年です。ですからベザリウスのはそれより百九十年ばかりまえです。玄白たちが小塚原でクルムスの図を見たときからいえば二百二十八年もまえです。

これにくらべれば、山脇東洋の「蔵志」は、ベザリウスから二百数十年あとなのに、その図の説得力はおはなしになりません。それでも、「蔵志」は、中国の医学書に出ている人体構造は実物とはまるでちがうということを確認する予備的な役目をつとめた功績はあったといえましょ。

## 五

ところで、玄白たちのターヘル・アナトミアにたいする反応はきわめて特異なものでありました。「蘭学事始」にありますように、玄白がこの本を手にいれたのは、明和八年春（一七七二）蘭館長の一行が將軍拜礼のため江戸に来たときで、中川淳庵の紹介によるものでした。良沢は前年長崎で手に入れたと、自分でいっています。玄白が三月四日に小塚原で腑分があるという知らせをうけた前夜、良沢にも淳庵にも知らせて誘いましたところ、二人とも翌朝山谷の出口の茶屋へやってきました。すると玄白も良沢もおなじターヘル・アナトミアをたずさえていました。ふたりともこの本の図を实物とくらべるために持ってきたのです。このときは「蘭学事始」にくわしく書いてありますから、御承知のこととおもいます。

さて、この日の腑分のとき、この人たちは自分の目で实物と図とをくらべてみて、図の正確なおどろきました。上述のように、二百年まえのベザリウスよりはるかに劣る図ですが、とにかく实物そっくりであることにおどろきました。

そしてこの人たちは、図が正確であるというだけのことから、この本には人体構造についての真実が書いてあるにちがいないと信じこみました。自分たちがこれまで理解していた漢方医学における人体構造の知識は全くいかげんなものであった。そんないかげんな人体構造を真実と信じて、医師をくみたてている漢方は信じられない。そう深く反省して漢方をすて、真実を述べているにちがいない西洋の解剖学の中味をまず知りたいものだ、きっと利益があるにちがいないと考え、早速翻訳しようと決心しました。これはたいへん論理的な結論だとおもいます。

こうしてできたのが「解体新書」五巻で、それがいまからちょうど二百年まえの一七七四年八月（安永三年）に出版されたというわけです。

## 六

解剖図のことを述べましたから、ついでに解体新書の付図のことに触れます。

解体新書の付図の下絵をかけたのが小田野直武（一七四九—一七八〇）です。直武は秋田蘭画をかく画家で、藩主佐竹曙山とともに代表的な人物です。直武の下絵は、クルムスの原図、その他解剖図の銅版画を毛筆で写し、それを板にはりつけて木版にほったのですから、原図の写実性よりはるかに劣っています。それでもこの付図を見て、その真实性に感動し、本文の記述に魅せられた若い学徒がたくさんありました。そしてこれこそ西洋医学の一端を示すもので、実証的な医学だ、わが進むべき医学の道だと信じ、西洋医学に入るものがつきつきと出ました。京都の小石元俊（一七四三—一八〇八）もそのいちじるしい例で、すでに漢方医学で身を立っていた人ですが、解体新書を見て大いに感ずるところがあり、江戸へ出て玄白にいろいろと質問し、自分でもしばしば人体を解剖し、たびたび解体新書をつかって門人を教えたということです。このことは蘭学事始に書いてあります。元俊はいわゆる漢蘭折衷で有名な人になりました。

## 七

クルムスの解剖図のことはこれくらいにして、つぎにその本文にうつりたいとおもいます。

さきほど申しましたように、玄白たちは、クルムスの図に感心して本文を訳そうと考えました。オランダ語が満足に読めない玄白たちに行してみれば、内容をしらべてから訳すなどということはできません。その意味では全く、目をつぶって、あてずっぽうであります。ところがこれが幸運であった。このことはあとで述べます。

クルムス (Johann Adam Kulmus) (一六八九—一七四五) のターヘル・アナトミアといえますのは、いつごろからあった名かわかりませんが、日本人のつけたカタコト的な名でありまして、実はドイツ人クルムスがドイツ語で書いた *Anatomische Tabellen* (解剖学表) のオランダ語訳 *Ontleedkundige Tafelen* (一七三四) のことです。オランダ語の題もおなじく「解剖学表」であります。「表」というのは、付図と関連させながら「表」の形式で名称やその説明をなら

べたもので、随処に簡潔な説明がさしはさんであります。たとえば「頭」のところには、「体のいちばん上にあるまるい部分」というような説明がついています。解剖学の記述はこの種のものが多く、見ればわかることが、文章に正確に定義してあるのです。このいいまわしがかえって実体をわかりにくくしている傾向もありません。玄白たちが「眉」のところに「眉は目の上にある一対の毛の生えた弓状の部分……」というようにいいまわしを理解するのに一日いっぱいかかったというわけでしょう。

このようにクルムスは普通の解剖学書とちがって「表」なので、各筋の名やはたらきなどはうまくまとめてあるので、解剖学の勉強にたいへん役に立ったものとおもわれます。ですから、ドイツ語本は改訂増補版をたびたび出し、ほかにラテン語本、フランス語本、オランダ語本など、ずいぶんひろく使われたものようです。それだからこそ、オランダ語本がすくなくとも二冊は日本にまで渡来することになったのだとおもいます。

クルムスのいいところは、大きさも内容もちょうど手ごろであったということです。片手のてのひらにはいるくらいですし、内容もほどほどに簡潔である。ほとんど毎ページにとでもくわしい脚注がありますが、これははじめではとても読めないから全部手をつけずに、本文だけを訳すことにした。そのおかげでまがりなりにも解体新書ができたのだといえます。もっともすこし他の解剖書の内容を読んで引用したりしていますが、主体はクルムスのものです。

もしもこれがベザリウスのような大きな本だったら、内容に圧倒されて、翻訳はとて成しなかつたでしょう。そう考えますと、原本がクルムスであったということは、決して杉田玄白の選択によるものでなく、全く偶然のもので、たいそうわが国にしあわせな偶然でした。

## 八

解体新書は一七七四年、すなわち二百年前出版以来日本の多くの学徒に影響をあたえましたが、内容の要領のよさから

いえば、宇田川玄真（榛齋）（一七六九～一八三四）の「医範提綱」（本文三卷、一八〇五年、付図一八〇八年）がいちばんでしょう。よくこなれたカナマジリの日本語の解説が、みじかい漢文の正文のあとについていて、とてもわかりやすくできています。程度は高くはありませんが、当時の水準にちょうど適合していたのでしょう。これはぜひぶん読まれたものとおもわれます。これを読んで啓発されて西洋医学を志したという文献がよくあります。のちに有名になった坪井信道（一七九五～一八四八）などは、若いころこれを読んで感心し、後年江戸に出てその著者宇田川榛齋の塾に入りました。われわれはこの「医範提綱」は蘭学時代を通じてのベストセラーであったろうと考えております。

今日医範提綱を古本で買おうとしますと、なかなかキレイな、いわゆる「美本」がありません。たいてい、ふるぼけて、使いふるしたというふうなものです。版もずいぶん磨滅したものが多くようです。これもたくさん刷ったことの証拠です。ある意味では、こういうふるぼけたものの方が歴史的価値があると申せましょう。

## 九

さて、それでは解体新書の内容そのものは、どのような影響を後世の日本にあたえたか？ 今日とどのようなかわりあいがあるか？

いうまでもなく、蘭学の時代には、解体新書はその歴史的意義がひとつの象徴としてながく尊ばれました。その校訂増補版「重訂解体新書」（十三卷）（大槻玄沢、一八二六年）は実に五十年もあとの出版で、もとの解体新書を高度に学術的なものに高め、その註解に玄沢特有の深い探求のあとを示し、文献として貴重なものですが、そのあいだに医範提綱とその付図のような、当時の時代によく合った解剖書が出ましたので、どちらかといえば、学者の高度な参考書といったかたち位置づけられました。

おしなべて、これらの解剖書は、明治の代になってからは、新しい解剖書に道をゆずり、ただ解剖学用語（術語）のな

かに生きのびただけとなりました。あれほど堂々とはなやかに世のなかに出た解体新書をおもいますと、いかにもさびしい気がいたします。

こういうところが、自然科学分野の著作と人文科学分野の著作とのちがいです。人文科学の著作は、それ自身の持つ価値をもって後世に生きのびる可能性があります。自然科学の著作の内容は、つねに新しい知見、寄与の「ふみ台」になつてだんだんその自然科学的価値をうしない、かえりみられなくなる宿命をになっています。ただその著作がいきのびることのできるの、その歴史の意義によってであります。われわれがクルムスのターヘル・アナトミアや解体新書をつねにおもいおこしているのは、この歴史の意義を価値づける立場に立つてのことです。

## 10

こういう立場で解体新書をながめますと、とぼしいオランダ語の知識で出発して、オランダ語で書いた学術書の本格的な翻訳書ができたということを実示した点が非常に重要であるとおもいます。いまならなんでもないので、長崎の和蘭通詞が翻訳できるのは当然としても、通詞以外の学者が西洋の学術書を訳すことができるようになった。これで、オランダ語をものにすれば、自分たちが全く考えおよばなかった西洋の考え、文化の所産がわかるようになった。そのさきがけをしてくれたのが解体新書であつたというわけです。

事実、これに力を得て、玄白はひきつづいてヘイステルの外科書の翻訳に手をつけています。しかし玄白は解体新書のおかげで高名となり、診療がいそがしくなりましたので、弟子の大槻玄沢にあとをまかせてしまいました。玄沢は翻訳にずいぶん努力しましたが、なにしろ原書がとて大きいものでしたから、ずっとあとでほんの最初の一部分を訳して「瘍医新書」(四卷)(一八二五)と題して出版しただけで完成しませんでした。もうひとつ玄白からのまれた解体新書の校訂増補の方は完成し「重訂解体新書」として出版したことは、右に述べました。

解体新書を翻訳したときの先導者であった前野良沢は、オランダ語の知識はますます深くなったようで、独自の興味でいろんな訳書を完成しており、オランダ語学者としては江戸では重要な存在でした。玄白は自分のところへオランダ語を学びに来たものは、たいがい良沢に紹介して学ばせています。

宇田川玄随（槐園）（二七五五―一七九七）は、はじめ漢方医学をおさめていましたが、桂川甫周、大槻玄沢に接して蘭学に転じ、オランダ語を学んで、日本で最初の西洋の内科の訳書「西説内科撰要」（一八卷）（一七九二）を出版しました。

こうなってきましたと、加速度的に翻訳がふえ、オランダ語を通じてオランダの学術文化の知識がふえました。それがとりもおさず「蘭学」とよばれるようになり、それを知っている「蘭学者」ができてきました。玄白が蘭学事始の冒頭で、蘭学ははじめ自分たち二三人でふとはじめたものだが、こんなにさかんになるとはおもわなかったという意味のことをいっているのが、このことです。玄白は「事始」を一八一五年に書きましたが、そののちのさかんになりようは、玄白が生きていたら、ほんとにびっくりしたにちがいありません。

その発展の実際は、別室の「洋学二百年記念展」の各部門をごらんくださいればわかりますように、医学もあれば天文があり、地学・地図があり語学があり、哲学・宗教・政治・歴史というような抽象的なものがあり、動物学・植物学・本草学・物理学・化学というような自然科学があり、さらに建築・築城から砲術・兵器・造船というような技術があり、のちには陸軍や海軍というようなものまで導入されています。また語学も大いに発達しました。絵画もいろいろ影響をうけました。

## 一一

ここで、オランダ語が意外な分野に役立った実例を御紹介いたしましょう。それは司馬江漢の場合です。江漢は西洋の銅版画の技術を会得した最初の日本人だということですが、江漢は、シヨメールの百科辞書（のちの「厚生新編」）のな

かのエッチングの技法を書いた部分を大槻玄沢に訳してもらい、それをもとに工夫したということです。会場の絵画の部門をござんになりますと、司馬江漢や小田野直武の西洋の風物をかいた洋画風の画が展示されておりますが、そのかたわらに、その手本になった原画が出てあります。くらべてござんになりますと、原画全体を模写して、それを着色したものであったり、それを修飾したり、一部分をとり出して大きくかいたりしてあります。江漢たちのこういう絵だけを見ますと、いかにも異国風で、当時の絵の愛好家をひきつけたことでしょう。

この異国情緒、異国趣味という程度の関心のなから、学術的な蘭学が生まれ、さらに洋学に発展したということができましよう。

## 二二

解体新書の出現が後世におよぼした第二の影響、すなわちオランダ語（ひろくいえば西洋の「ことば」）の学術書の本格的な翻訳ができるということの後世への影響は、「蘭学」の発展のきっかけとなり、学芸一般にわたって、西欧文化の導入という結果をもたらしました。それは今日までつづいているともいえるわけですが、いま解体新書の出版（一七七四）から明治維新（一八六八）までの約百年に区切ってかえりみますと、この時期にもたらされた西欧文化の特色は、その「ほんもの」との直接の接触がいちじるしくなくなかったことであつたといえます。つまり、書きものを通じ、あるいは見たりきいたりして知ることのできることは大体理解することができたが、その「ほんもの」「実体」に接していないから、ほんとうに知ったとはいえなかつた。その点が重要であるとおもいます。

しいて申せば、鎖国時代に出島にいたオランダ人（時にはオランダ人以外の国の人も）とか、蘭館長（カピタン）の一行が將軍に拝礼のため江戸にきたときとかに、この人たちに接触するのがせいっぱいで、その人たちから日本人がおくりものをもらったり、本その他の品物を買ったりする程度にすぎませんでした。



御承知のとおり、出島蘭館付の医者にはときどきすぐれた人がいまして、こういう人たちに接することのできた日本人は、書きものではえられないことをいろいろ学ぶことができました。蘭館付の医者はオランダ人ばかりとかぎりませんでした。有名な三人、ケンペル(Engelbert Kämpfer) (一六五一―一七一六)はドイツ人、チュンペリ(Carl Peter Thunberg) (一七四三―一八二八)はスウェーデン人、シーボルト(Philip Franz von Siebold) (一七九六―一八六六)はドイツ人です。いずれもオランダ商館付の医師の資格でオランダ国にやとわれてやって来たのです。このなかに一番日本人との接触の多かったのはシーボルトで、その日本滞在中(一八二三―一八三〇)多くの若くて有能な青年に医学・医術や自然科学の方法を実地について教えました。したがってシーボルトの日本人ならびに日本にあたえた影響はたいそう大きく注目すべきものがあります。

しかしそれでも、明治の直前十年あまりになって安政二年七月(一八五五)幕府が長崎に海軍伝習所を設けて招いたオランダ人教官、つづいて安政四年(一八五七)海軍伝習所付医官として来た軍医ポンペ(Pompe van Meerdervoort) (一八二九―一九〇八)を特に招いてつくった医学伝習所(養生所)での活動は、先人たちにも増して日本人との接触の大きい、したがって効果の大きいものでした。特にポンペは西洋での医学教育になぞらえて組織立った西洋医学教育をおこない、病院実習、臨床講義のようなことまでしました。これで日本の医学生は、はじめて西洋医学とその教育法の実際を体得したのだといえます。ポンペはその教育全般にわたってオランダ語で講義し、日本人が通訳するという方式をとりました。一方講義の要点をポンペ自身がオランダ語で書いて、学生に書きうつさせるという方法もとっています。これで日本人のオランダ語が全面的に本格的に役立ったわけです。この長崎伝習所の教官の関係から、幕末に日本人が何人かオランダに官費で留学することになりましたし、ほかにロシア、イギリス、フランスなどへの留学生在が派遣されるまでに発展しました。

ほんとうに西洋の学術を理解するには、ここまでいかなければほんものではありません。実際ここまでいけたという

も、それにさきだつ蘭学の時代があったからであります。

### 一三

幕末にいたって鎖国から開国になり、欧米諸国と通商条約がむすばれますと、オランダ語のほかに、英語、フランス語、ロシア語、のちにはドイツ語もつかわれるようになってきました。多くの人はオランダ語を多少とも知っていましたので、その知識にもとずいて、あたらしい外国語を学んで、なんとか身につけました。その結果これまで「蘭学」といっていたのが、「蘭学」では具合がわるくなり、「英学」「仏学」などをひとまとめにして「洋学」とよばれるようになりました。もっとも「洋学」とか「西学」ということは「蘭学」の時代にもつかわれていましたが、内容からいってもいよいよ「洋学」というのがふさわしくなってきました。

### 一四

日本で、オランダ語から他の外国語に移行した代表的の人は、福沢諭吉です。福沢はオランダ語を十分役立たせることのできる段階まで来たうえで英語にうつりました。福沢がカタカナで書いている英語の発音を見ますと、オランダ語風の発音の名残があります。こういう発音で福沢の英語がよく相手に通じたものだとおもいます。もっとも福沢が実際に会話したのは、福沢がアメリカとかヨーロッパにいったときがおもで、あとはもっぱら英語の読解力によって欧米の知識を十分に消化し吸収したのであらうとおもいます。

### 一五

日本の各分野でおこった、オランダ語依存からの離脱は、具体的に申しあげますとキリがありませんが、明治に入って

からあちこちでおこり、各分野の事情に依りて、それぞれ曲折をへて結局今日につながるわけであります。

それですから、明治に入ってから洋学の導入があれほどなめらかに、圧倒もされずにおこなわれたのは、それ以前の蘭学・洋学の時代の百年の積みかさねのおかげです。さかのほれば、一七七四年の解体新書の出版がまきおこした大きな革新であります。蘭学の文化的意義はたいそう大きいといわねばなりません。

## 一六

かえりみれば、解体新書出版から百五十年くらいまでは、オランダ語からはじまり、そののち分野によって英語、フランス語、ドイツ語への移行があつたにしても、たえず外国語の習得が大きな役割をはたしていたことをよく認識せねばなりません。もとよりの国でも外国語を知らずに學術・文化の向上をはかることはできないとおもいます。しかし文化の進んだ国では、自国語が十分主役を演じていて、そのうえで外国語が補助的なはたらきをするというのが普通ですが、日本の場合はそれが逆で、自国語より外国語の力の方がはるかに大きな役をはたらいてきたのであります。

最近の五十年ではどうか？

これはちょうど「昭和」の今日までの全長にあたります。このあいだに日本の學術、文化における日本語の役割と外国語の役割はどうかわつたか？ たしかに日本人の役割は、そこからの受入れというばかりでなく、世界への貢献度も高くなつてきました。これはすぐれた日本人のおかげです。しかし日本語の役割は、それほど大きくなつたとはいえないようです。むしろ日本人の国際的な活動が大きくなればなるほど、ひろくつかわれている外国語にまきこまれてしまふかたむきが見えます。そして日本語があべこべにまづしくなつていくようにおもいます。

鎖国の時代から開国の時代へとすすんだうえ、さらに国際時代へ入つてみると、日本にかまつていられなくなつてきたというのでは、こまります。

その意味で、解体新書出版から二百年たった今日の日本の学術・文化は一面において、重大なまがりかどにさしかかったといえるのかもしれない。

このたびの記念展にはつぎの副題がついております。

「世界のなかの日本の学術のあゆみのあとをたどって」  
世界を十分に意識したものであることを御注意ねがいたいのです。この気持でござんただければ幸に存じます。御参考になるところがあるかもしれません。そこまでお役にたてば、この解体新書出版二百年という記念すべき年に、この催しをいたしました意義があるというものでございます。

## 一七

おわりに、この記念展の主催団体の一つ「解体新書出版二百年記念—洋学二百年記念会」の会長として申しあげます。

このたびの記念展が連日たいへんたくさんの入場者を迎え、よろこばれておりますのは、貴重な展示資料をお貸しくださいました方々、各部門の展示にすべての責任を持っていただきました展示委員諸君、短時日に見事な「図録」をつくりあげられた平凡社、そしてそのすべてを総括的にまとめ、見事な展示を構成された三越本店宣伝部の諸君に心から感謝いたします。また別に、全国から貴重な資料を搬入し、なんの事故もなく返却していただいた大和運輸の諸君に、あらためてお礼を申し上げます。

本稿は昭和四十九年八月十七日三越本店三越劇場における洋学二百年記念式典、公開講演における講演を大中に加筆したものであります。

(東京大学名誉教授・蘭学資料研究会々長)

## 越後の蘭方医森田兄弟について(四)

長谷川 一夫

日本医史学雑誌・第二十一卷  
第二号・昭和五〇年四月 昭和四十九年二月十二日受付

### 四、その他の功業——献策の数々——

(1) 大河津分水に関する献策、その豊富なる水量をたたえて流れる信濃川は、現在では越後平野を潤す農業用水としてだけではなく、沿岸工業地域の工業用水としても幅広く活用されている。

しかし、古くは暴れ川の名も高く、水害を引起すこと幾度となく、農民憂慮の根源であるばかりか、諸藩治水政策でもあった。

分水工事の請願は、享保年間の本間数右衛門、河合某を最初として、幾度か繰返されたが、いずれも経済的、技術的な困難さから実現にはいたらなかった。

明治元年の大水害は、越後水害史上最大の被害であった。特に被害の大きかった新発田藩は、諸藩に呼びかけ、同年は新発田藩以下七藩、翌二年には長岡藩を加えた八藩が、越後府に請願した。その結果、同年四月一七日越後府は分水工事の実施を各藩に通達した。

しかし、経済的基盤の確立していない維新政府は、財源に窮迫し、五ヶ月後の同年九月にはその延期を各藩に通達している。そのため、工事推進を願う有志は、工事再開請願のため上京する程であった。

当時、西萱場村に居た円治も、明治二己巳年十二月付で、「(略) 堀落之御普請被<sub>レ</sub>為<sub>ニ</sub>成<sub>下</sub>」候得ハ、莫大成御国益諸民救助之御仁策と奉<sub>レ</sub>存候(略)<sup>(43)</sup>と記し、工事の推進を願望していた。ただし、この請願書が上申されたか否かは不明である。円治はこの請願書の他に、国益論・新潟湊障筋無<sub>レ</sub>之却而弁利之論・新潟湊繁昌ニ相成候論・寺泊駅筋并船掛之論・水旱両端之患を除く御普請方之論の五ヶ条からなる「信濃川須走口堀落建言意味書」、工事実施方法及び経費の見積りを説いた「大河津邑より須走口迄新川御普請法并御雑費見積書」、さらに、水路開削予定図や土塁建設法などを遺している<sup>(44)</sup>。

(2) 貧民救済を請願、幕末・維新に亘る越後平野を襲った「水兵の両難」。つまり、水は前述の信濃川の大洪水であり、兵は戊辰戦争による荒廃である。この両難は世情不安を引起すだけでなく、庶民の生活を窮乏させ、多くの窮民を出した。それに関し、円治は、「乍<sub>レ</sub>恐以<sub>ニ</sub>書附<sub>ニ</sub>小民之輩一統難泐仕候ニ付奉<sub>ニ</sub>歎願<sub>ニ</sub>候<sub>一</sub>」<sup>(45)</sup>と題し、「(略) 市町之貧民山中之樵者海浜之漁夫等ハ、前後不弁之懸族ニ候得ハ、遂ニ徒党杯を催シ一夜之間ニ数多之國財を毀亡シ、頭取之者ハ重き蒙<sub>ニ</sub>刑罰<sub>一</sub>、富饒之輩ハ口財ハ勿論貨米ニ至ル迄為<sub>レ</sub>失御上様江ハ奉<sub>レ</sub>懸<sub>ニ</sub>御苦惱筋<sub>ニ</sub>誰老人利潤益方ニも不<sub>ニ</sub>相成<sub>ニ</sub>之義を仕起候ハ、是皆米価高料方出来いたし候次第ニ御座候、(略)」と、米価高騰に対する不安な状況を推察している。

そして、この世情を回避させるための手段としての論を、「米価之高料相続き小民難泐いたし候ニ付、御救助願之意味次第書」と題して認めている<sup>(46)</sup>。

また、この請願に類似した、「乍<sub>レ</sub>恐以<sub>ニ</sub>書面<sub>ニ</sub>御国益之義奉<sub>ニ</sub>申上<sub>ニ</sub>候<sub>一</sub>」と題する請願書と、「窮民御手宛方乞食御差留ニ付御国益意味書」を認めている<sup>(47)</sup>。しかし、これらも分水工事の請願同様、上申の有無は不明である。

(3) 栃尾町に關係したものの、大橋掛替工事に關する清水弥右衛門の「乍<sub>レ</sub>恐以<sub>ニ</sub>口上書<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>願上<sub>ニ</sub>候<sub>一</sub>」(嘉永元年十月)、並びに、「大布橋掛替之意味書大細書」草稿、宗右衛門、弥七二名の連署(慶応元丑羊霜月)が、遺されている<sup>(48)</sup>。いずれも請願者の相談をうけ、協力を進めたものであろう。

これらは、いずれも地域社会の実情を適確に把握し、その対策等について言及している。それは、森田兄弟の遊学、あ

るいは日頃の研鑽が、蘭方医学の修得を主としながらも、多岐に亘る知識を吸収した所産であると考えられる。

## 五、おわりに

以上、森田千庵・円治兄弟の蘭方医学の修得、診療活動の実地、地域社会への働きかけ等について述べてきた。

そこで、越後における森田兄弟の活動について要約すると、

(一) 森田兄弟が所持していた蘭方医学関係の医書は、兄弟間の貸借による利用にとどまらず、近隣の医師たちにも貸与されて、その研鑽の資料とされている。

(二) 蘭方医の遊歴などの機会に、同行の医師や親交ある医師と共に千庵や息子専庵が研修している。その際、時には、千庵所持の医書がテキストとして使用されている。

(三) 遊学中交際のあった蘭学者、医師、なかでも宇田川塾生との交流。森田兄弟は特に長岡藩侍医小村英庵ならびに椀斎とは親しく往復があった。そして、自らも調査、研究に励むと共に、相互の研究に協力し合っていた。また、千庵は北蒲原郡五十公野村の嶋津圭斎とも蘭書の借用、売払いなど親しく交際があったようである。その他中蒲原郡村松の河野越竜やその門下生片桐道林なども親しかつたようである。このような交流の中で千庵の影響を受けた竹山祐分が、土生塾に入門し、蘭方医学の修得に励んだことから、森田兄弟の影響力の少なからざる点が窺われる。

それは、換言すれば、特に宇田川塾生を中心とする医師、蘭学者との交流の中で、森田兄弟が、彼らの所持する医書の活用や遊歴医師訪問の機会を通じて、越後へ蘭方医学を導入する、まさに原動力となっていたということもできよう。

### 註

(1) 新潟県栃尾市 森田芳夫氏蔵 森田家は千庵の弟円治の傍系にあたり、千庵の円治宛書翰をはじめ千庵関係および円治関係の資料を多く蔵している。

(2) 片桐一男氏「蘭医森田千庵伝研究」『法政史学』第一四号、昭和三六年一〇月。片桐氏はこの論文のほかに「蘭医森田千庵と

その資料および蔵書「『執佐研究』第十八号、昭和三十七年三月など、千庵に関係したものを発表されている。本稿執筆にあたり、栃尾市の森田家所蔵の資料を除くそのほとんどは、片桐氏の論文の中から引用した。

- (3) 片桐一男氏「蘭医森田千庵伝研究」『法政史学』第一四号。
- (4) 森田芳夫氏蔵。
- (5) 片桐一男氏前掲論文。
- (6) 『普山先生和蘭十六方』文政癸未(六)一冊自筆写本は、千庵傍系にあたる新潟県加茂市、小柳鉄次氏蔵。『泰西度量考』一冊自筆写本、『挙家纂要訳稿』文政五午一冊自筆写本、『船品写真図譜』文政癸未秋九月二十有二日一冊自筆写本は、新潟大学図書館蔵。
- (7)・(8) 片桐一男氏前掲論文。
- (9) *terebinthina* 殊に、種々のマツの材を蒸留して得られる揮発性の精油である。一種爽快な樹脂性の香気を持つ。膏薬類の製造に利用される。
- (10)・(11) 片桐一男前掲論文。
- (12) この蘭日単語帳について、詳しくは片桐一男氏「阿蘭陀通詞、蘭学者の使用せる単語帳について」『文獻』第十・十一号を参照されたい。
- (13) 片桐一男氏「蘭学者森田千庵と栃尾」栃尾新聞第七二〇号、昭和四三年一月二三日。
- (14) 片桐一男氏「蘭医森田千庵伝研究」『法政史学』第一四号。
- (15)・(16) 森田芳夫氏蔵。
- (17) 片桐一男氏前掲論文。
- (18)・(19) 森田芳夫氏蔵。
- (20) ヘイステルの内科書とは、アムステルダム版の *Laurentius Heister: Practicaal Geneeskundig Hand-Boek, of Kortbondige, echter volkomene Onderreching. On de in wendige Ziekten 't best to geneezen.* であると考えられる。  
緒方富雄氏「ヘイステル内科書とそのなかのヒポクラテスのことば」『日本医史学雑誌』第一七巻第四号、昭和四六年二月。
- (21)・(22) 森田芳夫氏蔵。
- (23) 片桐一男氏前掲論文。
- (24) 蒲原宏氏「病氣と医学—新潟県医事史から—」『新潟日報』昭和四八年六月二六日。



(25)・(26)・(27)・(28)・(29)・(30)・(31)・(32)・(33)・(34) 森田芳夫氏蔵。

(35) 長岡市役所編『長岡市史』一六七―八頁。

(36)・(37) 森田芳夫氏蔵。

(38) 栃尾市史編集委員会『栃尾市史料集』第二集、四〇―一二頁。第六集、二二八、二五三―四頁。

(39)・(40)・(41)・(42)・(43)・(44)・(45)・(46)・(47)・(48) 森田芳夫氏蔵。

(新潟県栃尾市立一之貝小学校教諭)

〔附記〕 小稿は栃尾市史編集のための調査に基くものである。執筆にあたり東洋大学講師片桐一男氏をはじめ、同市史編集委員、調査委員の諸氏、同市史編集室長山内貞次氏に御教示をいただいた。また、森田芳夫氏には資料の長期貸出、自由な閲読を許していただいた。併せて深甚なる謝意を表する次第である。

## 日本医史学会々々則

第一条 本会は日本医史学会と称する。

第二条 本会は医史を研究しその普及をはかることを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

一、年一回、総会を開く。

二、本会の機関誌として『日本医史学雑誌』を発行し、これを会員にわかす。

三、随時、地方会、例会を開き、研究発表、展覧などを行なう。

四、日本の医史学界を代表して内外関係学術団体との連絡協力をはかる。

五、その他の事業。

第四条 本会の主旨に賛成しその目的達成に協力しようとするものは、理事または評議員の紹介を経て会員となることができる。

第五条 会員は会費として年額三〇〇〇円を前納する。入会者は一〇〇〇円を納入する。ただし外国に居住

する会員は年額一五ドルとする。

会員は研究発表および本会の事業に参加することができる。

本会に名誉会員と賛助（維持）会員をおくことができる。名誉会員は本会の事業に多大の貢献した者を評議員会の議をへて推せんする。賛助会員は本会の趣旨に賛同し、年額一万円以上を収める者とし評議員会の議をへて推せんする。

第六条 本会に次の役員をおく。

一、役員は理事長、会長、理事、監事、幹事とする。

二、理事長は一名とし理事会で互選し本学会を代表する。

三、会長は年一回の総会を主催し、その任期は総会終了の日までとする。

会長は理事会の推せんにより理事長が委嘱する。

四、理事は若干名とし、理事長を補佐し会務の遂行にあたる。

理事、監事は評議員の中より評議員会の推せんにより理事長が委嘱する。

五、本会の実務を処理するため、常任理事二名、

幹事若干名をおく。常任理事は理事より、幹事は会員より理事長が任命する。

六、役員任期は二年とし重任を妨げない。(ただし会長を除く)

以上の役員は総会の承認を得るものとする。

第七条 評議員は若干名とし、普通会员の中より理事会の

推薦により総会で決める。

評議員会は本会の重要な事項を議決する。任期は

役員に準ずる。

第八条 本会の事務所は順天堂大学医学部医史学研究室内

(東京都文京区本郷二の一)に置く。

第九条 本会は理事長の承認により支部または地方会を設

けることができる。

第十条 会則の変更は総会の承諾を要する。

### 『日本医史学雑誌』投稿規定

発行期日 年四回(一月、四月、七月、十月)末日とする。

投稿資格 原則として本会々員に限る。

原稿形式 原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表

題、著者名のつぎに欧文表題、ローマ字著者名

を記し、本文の終りに欧文抄録を添えること。

原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序の決定は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

著者負担 表題、著者名、本文(表、図版等を除く)で五

印刷ページ(四百字原稿用紙で大体十二枚)ま

では無料とし、それを越えた分は実費を著者の

負担とする。但し欧文原著においては三印刷ペ

ージまでを無料とする。図表の製版代は実費を

徴収する。

校 正 原著については初校を著者校正とし、二校以後

は編集部にて行なう。

別 刷 別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送り先 東京都文京区本郷二丁目一の一、順天堂大学

医学部医史学研究室内 日本医史学会

編集委員 大島蘭三郎、大塚恭男、蔵方宏昌、酒井シツ、樋口誠

太郎、室賀昭三、矢部一郎、矢数圭堂

編集顧問 小川鼎三、A・W・ビーターソン

日本医史学会役員氏名 (五十音順)

- 理事長 小川 鼎三  
 会長 緒方 富雄 高瀬  
 常任理事 石原 明 大島蘭三郎  
 会計監事 宗田 一  
 理事

- 赤松 金芳 阿知波五郎 石川 光昭  
 今田 見信 内山 孝一 大塚 敬節  
 大矢 全節 緒方 富雄 蒲原 宏  
 佐藤 美実 杉 靖三郎 鈴木 正夫  
 鈴木 勝 宗田 一 津崎 孝道  
 戸近太郎 中野 操 三木 栄  
 矢数 道明 吉岡 博人 和田 正系  
 大塚 恭男 酒井 シツ 杉田 暉道  
 谷津 三雄

日本医史学会評議員氏名 (五十音順)

- 赤松 金芳 安芸 基雄 阿知波五郎  
 青木 一郎 石原 明 石田 憲吾  
 石川 光昭 石原 力 今市 正義  
 今田 見信 岩治 勇一 内山 孝一  
 大島蘭三郎 大塚 敬節 大塚 恭男  
 大丸 勇 大矢 全節 緒方 富雄  
 小川 鼎三 大滝 紀雄 葦島 四郎  
 片桐 一男 川島 恂二 蒲原 宏

久志本常孝 藤原悠紀田郎 酒井 シツ  
 酒井 恒 佐藤 美実 清水藤太郎  
 杉 靖三郎 杉田 暉道 鈴木 正夫  
 鈴木 勝 鈴木 宜民 瀬戸 俊一  
 関根 正雄 宗田 一 高木圭二郎  
 高山 担三 田中 助 津崎 孝道  
 津田 進三 筒井 正弘 土屋 重明  
 戸近太郎 中泉 行正 中川 米造  
 中沢 修 中西 啓 中山 沃  
 長門谷洋治 中野 操 服部 敏良  
 福島 義一 藤野恒三郎 本間 邦則  
 富士川英郎 古川 明 丸山 博  
 松木 明知 三浦 豊彦 三木 栄  
 三酒 俊一 谷津 三雄 山形 敬一  
 矢数 道明 山下 喜明 山田 光胤  
 安井 広 吉岡 博人 和田 正系  
 巴陵室祐 高瀬 竹内貞士

四年に一度の「日本医学会総会」のムードが醒めやらぬ時期に「第七六回日本医史学会総会」が開催される。桜が咲き誇る季節、コートを手を脱ぎ、軽い足取りで集り易い、旅の季節であるが、それだけにまた、宿舍や足の便にも配慮して運営する総会準備委員の苦労が忍ばれる。先ずは準備委員の方々に謝意を表したい。

昨年は「解体新書発刊二百年」を記念しての総会で、一般口演も解体新書に関するものを主としたので多岐に渡らなかつた。今年は特にそういう限定もないので、一般

69

演題は多岐多彩である。医史学の巾広、さ深さが増してきた事を感じる。

しかし、総会が終つていつも残念に思うことがある。毎年、三十題前後一般口演がなされるが、論文として提出されるのはその中の三分の一にも満たない。折角の研究が、しゃべり放しで終わっているのは残念でならない。今年寄せられた抄録を見ても、独自の研究をしている人が多い。それだけになおさら論文として残され、後学の参考に供されることを望望する次第です。

(蔵方)

昭和五十年 四月二十五日 印刷  
 昭和五十年 四月三十日 発行

日本医史学雑誌  
 第二十一巻 二号

編集者代表 大島 蘭 三郎  
 発行者 日本医史学会  
 代表 小川 鼎三

〒二三 東京都文京区本郷二丁目  
 順天堂大学医学部医史学 研究室内

振替 東京 一五二五〇番  
 製作協力者 金原出版株式会社  
 医学文化保存会

〒二三 東京都文京区  
 湯島三三二四

印刷者 五協印刷有限公司  
 〒一七 東京都板橋区  
 南常盤台二二三

- The medical knowledge of Shodaiyu Motoki, an  
 interpreter in Nagasaki .....Teizo OGAWA and shizu SAKAI...(32)
- Differences between the two "Ontleediundige Tafelen  
 (1734)" .....Hisashi SAKAI...(34)
- On Japanese translations of G. W. Consbruch's  
*Geneeskundig Handboek voor Praktische Artsen,*  
 naar het Hoogduitsch door N. C. Meppen. Vol. I-II.  
 Amsterdam, MDCCCXXI-MDCCCXXIV. ....Goro ACHIWA...(35)
- Comparative study of Plenk's gynecological textbook  
 with its Japanese translation.....Ranzaburo OTORI...(36)
- On "Naigai-yoron" of Shinsai UDAGAWA .....Toshio OTAKI...(37)
- On Ransai EMA's "Taisei netsubyo shuyaku".....Hiroshi YASUI...(38)
- Two letters of Koan OGATA .....Yuichi IWAGI...(39)
- The later life of Dokai HAYASHI .....Shigeki TSUCHIYA...(40)
- Bau's Atlas of plastic surgery and Takeshi OSANAI  
 .....Eiichi HOSHI...(41)
- Kensuke YOKOYAMA as a medical school teacher in  
 the early years of the Meiji period in Miyagi  
 prefecture .....Shoichi YAMAGATA...(42)
- Kenzo YOSHIDA, the dean of Osaka medical school  
 .....Hiroshi MARUYAMA...(43)
- A history of the naval doctor in Japan.....Yoji NAGATOYA...(45)

## The 76 th General Meeting of the Japan Society of Medical History Members' Presentation

- Some theories on the development of the embryo in  
ancient India .....Kido SUGITA and et al. ....(12)
- The disire for healing the sick according to the Jizo-  
sanbu-gyo .....Masao SEKINE....(14)
- The folk-remedy guidebook of delivery in the 2nd  
year of Meiji (1869) "Oboko Nashi Daruma No  
Namari Otuge" .....Eiten TAMAKI....(16)
- Quelques matériaux d'histoire des tatouages .....Zensetsu OHYA....(17)
- Silicosis in the metal miners of the Tokugawa  
Shogunate .....Toyohiko MIURA....(18)
- Some comments on the history and technique of  
radiological medicine in Japan.....Masayoshi IMAICHI....(19)
- On the status of doctors in the middle ages of  
China.....Noriko YAMAMOTO....(20)
- On the physicians' oath .....Sakae MIKI....(21)
- Nicolao Tulp and his medical works.....Akira FURUKAWA....(22)
- Note on the early development of Anesthesia, with  
special reference to John Brown and Thomas  
Brown .....Soji KURIMOTO....(23)
- Prof. Canon, a researcher on the radiological study of  
the digestive organs .....Sosogu NAKAYAMA....(24)
- Some historical notes on Genseki Habu (1762-1848),  
who acquired the mydriatica (Scopolia Japonica)  
from Dr. v. Siebold.....Giiti Fukushima....(25)
- On Herbaria in the Yedo era .....Ichiro YABE....(26)
- Some observation on recently discovered materials on  
the history of medicine in Kyoto.....Yoshikazu SUGITATSU....(27)
- Two important theories on pathogenesis in the Edo  
era in Japan.....Yasuo OTSUKA....(29)
- Hayano's family in the Obama clan.....Yoshihiro TANABE....(31)

# アレルギー疾患に…

●抗アレルギー・抗炎症・解毒・肝保護作用をもつ

健保略称

強ミノC

## 強力ネオミノファーゲンC

包装 2ml 10管・100管, 5ml 5管・50管, 20ml 5管・30管

健保薬価 2ml 32円, 5ml 41円, 20ml 167円

### ●適応症

肝炎, 肝障害, 感冒, 気管支炎, 喘息, 腎炎, ネフローゼ, 血管性紫斑病, 白血球減少症, 自家中毒, 湿疹, 皮膚炎, 蕁麻疹, 小児ストロフルス, 神経痛, リウマチ, 腰・背痛, 妊娠中毒, 特発性腎出血, 急性出血性膀胱炎, 中耳炎, 副鼻腔炎, 口内炎, フリクテン, 結膜炎, 角膜炎, 薬物過敏症など

●内服療法には

## グリチロン錠2号

包装 1000錠, 5000錠

健保薬価 1錠 3.80円

[文献進呈]

文献御申越先 ミノファーゲン製薬学術部 [〒107] 東京都港区赤坂8の10の22  
(ニュー新坂ビル)

漢方薬

# 高島堂薬局

東京都文京区本郷 5 - 24 - 4

TEL (03) 811-1657 赤門となり

## 頭部外傷・脳術後・脳卒中の意識障害に



## LUCIDRIL

本剤は血液脳関門を通過し、脳内へ移行して脳幹部機能を賦活調整するものと考えられている。

薬理学的には、グルコースの脳内とりこみ増加(マウス)、脳創周辺部のグリコゲン顆粒増加(ラット)、神経組織の低酸素に対する低抗性増大(家兔)、脳各部の血流増加(ネコ)、ストレスに対する耐性増強(ラット)などの作用が認められている。

### ●適応症

注射用：頭部外傷・脳術後・脳卒中の意識障害、頭部外傷後遺症におけるめまい。  
錠：頭部外傷後遺症におけるめまい。

### ●包装

錠(100mg) 100錠 500錠 1,000錠 3,000錠  
注射用(250mg) 5バイアル 50バイアル  
(750mg) 10バイアル

### ●新薬価基準

1錠(100mg) 29.00円  
1バイアル(250mg) 666.00円

### ●使用上の注意

#### 錠

1. 本剤の投与により、不眠が、またときに悪心・食欲不振・胃痛等の胃腸症状、興奮、頭痛、焦燥感、肝機能検査値の異常等があらわれることがある。
2. 本剤の投与により、過敏症状があらわれた場合には投与を中止すること。

#### 注射用

1. 本剤の投与により、ときに不眠、不安、熱感、違和感、肝機能検査値の異常、血圧の下降または上昇等があらわれることがある。
2. 本剤の投与により、血管痛があらわれた場合には、本剤を20%ブドウ糖注射液に溶解して投与することにより軽減できる。
3. 本剤の投与により、過敏症状があらわれた場合には投与を中止すること。
4. 本剤は、溶解後なるべく速やかに使用し、放置したものは投与しないこと。



脳代謝改善剤

# ルシドリアル®

(塩酸メクロフェニキサート)



## 大日本製薬

大阪市東区道修町3-25  
提携 アンファア社(フランス)



外・薬・国

各学会の雑誌、抄録、プログラム、名簿及び各大学同窓会名簿、

## 祝 盛 会

各県医師会名簿などの印刷ならびに広告掲載のお世話を致します

# 06-943-1511

各医学雑誌の広告を取扱う

福田商店広告部

大阪市東区島町2-26

分室 大阪市東区釣鐘町1-17(橋本ビル)

TEL大阪(06)943-1511(代)

# 医・薬・化

全国 医学・薬学・化学・雑誌広告取扱

祝 盛 会



—本誌広告取扱—

合資  
会社

日本医学広告社

東京都千代田区神田駿河台2-9

日本医事新報ビル

電話 (03) 292-6961 (代表)

廣告

井上書店新集医書小目

(113) 東京都文京区本郷六丁目一八  
電話(〇三)八一—一四三五四(代表)

傷寒論精義

原 元麟著  
文化五年序刊 小虫有

六冊 八五、〇〇〇円

傷寒論正義

吉益南涯著 文政頃写  
未刊

一 一〇、〇〇〇

長命衛生論

附録共 本井子承著  
文化九年序刊 絵入

四 三五、〇〇〇

養生隨筆

河合元碩口授  
文政十年刊

二 二〇、〇〇〇

医道

中川壺山著  
文政十一年序刊

一 一五、〇〇〇

東垣先生此事難知集

和刻訓点 寛文頃刊

二 一〇、〇〇〇

導水瑣言

和田東郭口授  
文化二年序刊

一 九、〇〇〇

梅花無尽蔵 附別録及拾遺

長田徳本著 明和五年刊  
荻野元凱校 檜林栄哲序  
高部魯菴撰 天保十三年写  
文化八年成

合一 二五、〇〇〇

折肱秘録

漢蘭方 未刊

一 一〇、〇〇〇

藥性能毒

曲直瀬道三著 玄朔増添  
慶長十三年跋 寛永頃刊  
上下卷 横本

合一 二八、〇〇〇

崇蘭館試驗方

福井楓亭輯 薄葉写本  
紙數百三十六枚 未刊

一 二〇、〇〇〇

方読辨解

福井楓亭輯  
文政頃写 未刊

五 三八、〇〇〇

随 証 方

この書、乾々斎文庫以外に所在をしらず

平方・浅井南溟鑑定  
安永十年写 紙数七十九枚

蘭 学 実 験

神田充著 嘉永元年刊  
蘭薬親試実験録

七 新 薬

司馬凌海著 文久二年刊  
ボンベの説を主とす

薬品に化学的名称を用いた最初

馬 医 図 卷

鎌倉時代古写影印  
馬医肖像及薬草図

医 林 蒙 求

樋口季成著  
文化二年刊

扁 倉 伝 割 解

佐藤惟寅(浅井図南)著  
明和七年刊 上下卷

医 国 名 医 伝

岡本保孝著 伝写本  
紙数十七枚

禁裡 侍医 山科仙寿院入門盟詞

寛保二、三年 山本専安他自筆  
五通合装

香月牛山自筆書状

嶋本権之助宛 美幅

中国医学書目 正統

黒田源次・岡西為人  
台湾影印

中国医学本草考

岡西為人著 昭49

朝鮮医学書誌

三木栄著 増修新版 昭48

日本医学学史

附京大・富士川本目錄  
富士川游著 新装版 昭49

今後暫く本誌毎号に、新集の医書を掲載致します。殆んど一部限りの在庫でございますので売切の際は御容赦下さい。  
医書本草書以外の和本、漢籍、名家筆蹟、古地図、浮世絵等も取扱いますので、お合にて御整理の方を御紹介下さい

一 二五、〇〇〇

三 一五〇、〇〇〇

三 一五、〇〇〇

一 一〇、〇〇〇

三 八〇、〇〇〇

合一 三八、〇〇〇

一 六、〇〇〇

一卷 三五、〇〇〇

一幅 一二〇、〇〇〇

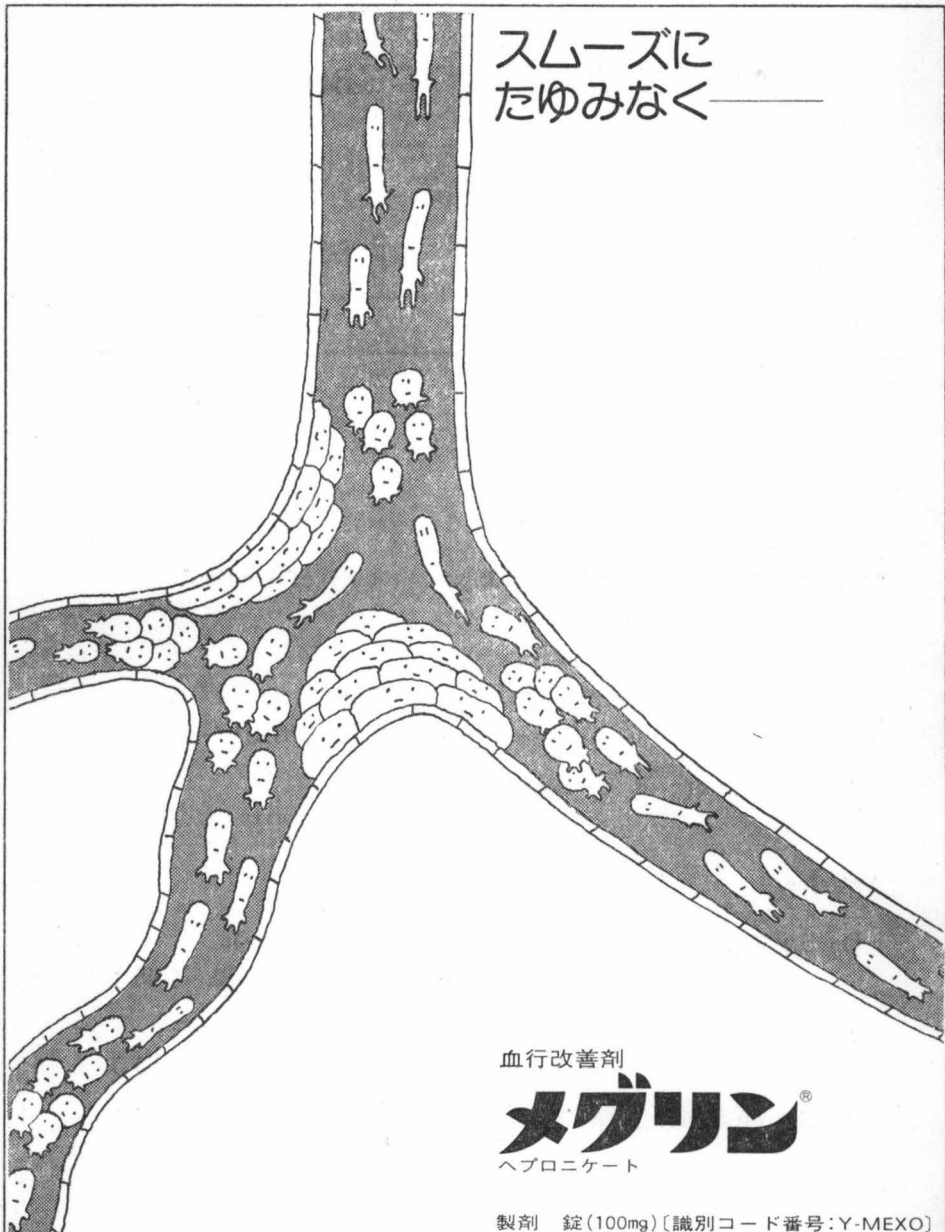
二 一〇、〇〇〇

一 一九、八〇〇

一 一八、〇〇〇

二 一三、〇〇〇

スムーズに  
たゆみなく



血行改善剤

**メグリン**<sup>®</sup>

ヘプロニケート

製剤 錠(100mg)〔識別コード番号:Y-MEXO〕

包装 PTP 1000錠 3000錠

バラ 1000錠

〈健保適用〉

●(使用上の注意)等については現品説明書をご参照ください



吉富製薬

大阪市東区平野町3-35

# NIHON ISHIGAKU ZASSHI

---

Journal of the  
Japan Society of Medical History

---

Vol. 21. No. 2

April. 1975

---

## CONTENTS

### **The 76 th General Meeting in Japan Society of Medical History Special Lectures**

A History of the Health of the School Child in Japan  
.....Morikuni SUGIURA...( 3 )

A Short History of the Bacteriology in Japan  
.....Tsunesaburo FUJINO...( 7 )

### **Articles**

On the KAITAISHINSHO (A Textbook of Anatomy)  
.....Teizo OGAWA...( 46 )

Two Centuries since the Publication of "Kaitai-shinsho"  
.....Tomio OGATA...( 53 )

Studies on Morita's Brothers.....Kazuo HASEGAWA...( 67 )

---

The Japan Society of Medical History  
Department of Medical History  
Juntendo University, School of Medicine  
Hongo 2-1-1. Bunkyo-Ku, Tokyo